ナイスNTRネイチャ

トイ提督

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

怪我による休養を余儀なくされたナイスネイチャ。

彼女はトレーナーの提案により日帰りツーリングを楽しんでいた。

別に好きってわけではないけど、最近はトレーナーの事を気が付けば目で追っている。

そんな二人の前に暴走族のヘッドを名乗るアイツが現れる。

かわいそうなのは抜ける。

目次

対面 ―― 1
勧誘 ―― 8
カチコミ ―― 15
未勝利戦 ―― 23
テイオーの相談 ―― 31
トレーナーさんのおうち ―― 41
ひとり ―― 51
阿寒湖特別 ―― 57
ステイゴールドの過去？ ―― 72
京都新聞杯 ―― 81

対面

『どうだ、ナイスネイチャ。いい景色だろう？』
『……』
『ネイチャみたいな超かわいいウマ娘を乗せて、俺の愛バも興奮気味だな！　そうだろう相棒……えっ、ネイチャのお尻があったかくて気持ちいいだって？　こら、ウマッ気を出すのはやめろ！　俺だってネイチャの素晴らしい膨らみが背中に……ほぐわっ!?』
『最低……』

ゆっくりと流れる風と雄大な自然風景が、私の頭突きによって乱される。蛇行する景色の中、私はヘルメットの中で大きくため息をついていた。
『ちょいちょい、トレーナーさんや。あたしにも限度ってものがあると思うんだよね。そりゃあ、お母さんがスナックをやってたから、そういう下ネタ大好きなお客さんを見て慣れてるけど、流石にこれ以上はセクハラだからね？』
『すまん……コイツに同期の野郎以外を乗せたのが久しぶりだからな。思った以上にもう感謝感激でいっぱいで……ばわっ!?』
『だから、そういうのはダメ！　もうっ……ホントに……』
再び蛇行する景色の中で、私はインカム越しに聞こえてくる彼の口説き文句に思わず赤面してしまう。彼のこういう所は嫌いだけど、それも全て私のためだと理解している。だからこそ、私は胸から溢れる思いを止めるのに必死だった。ただでさえ、彼に迷惑をかけているのに、こんな感情を表に出すわけにはいかなかった。
『さて、それじゃあ少し速度をあげようか。そうだな、これくらいがウ

マ娘の最高速度かな』

彼の操る鉄の愛馬がマフラーから唸り声をあげる。インカム越しに鼻唄を奏でる彼に、私は少しだけムっとした。確かに、この鉄の馬……バイクの方が私よりも速いかも知れない。それでも、彼の隣だけは譲りたくなかった。

『ごめんねトレーナー。あたしの怪我のせいで、シニアの大切な時間を棒に振ってる。チームにはあたししかいないし、トレーナーの評価だって……』

『気にするなネイチャ。トウインクルシリーズは最初の三年が肝心とか何とか言われてるけど、シニアで何年も戦ってる奴らだっている。それに、お前は素晴らしい素質を持っているんだ。怪我が治れば、G1レースにもきっと勝てるさ』

『トレーナー……』

『それより、今はツーリングを楽しめ。ほら、富士山が見えてきたぞ。うーん、快晴、快晴……』

トレーナーの関心するような声に釣られて、私は流れる景色をじっと見つめる。視線の先には、晴天の中でくっきりと見える日本の霊峰の姿があった。その雄大さに少し気圧されながらも、私はジャケットに包まれた大きな背中を抱きしめた。

『ねえ、トレーナー』

『どうした?』

『ありがとね』

『ああ、楽しんでくれてるならなによりだ』

トレーナーの鉄の愛バが再び唸り声を上げる。だから、私は振り落とされないように、彼の背中を抱きしめ続けた。

それから一時間後、私は展望台代わりのドライブインにてトレーナーと一緒にベンチへと腰を降ろしていた。彼はと言うと、さっきか

らソフトクリームを必死に舐めている。彼は、バイク乗りという奴は降り立った地で必ずソフトクリームを食べなければならないと力説していた。そんな彼に生返事を返しつつ、私は自販機で購入した紅茶をちびちびと飲んでいた。

「それで、どうするのトレーナー？　あたしはしばらく競技も出られないし練習も軽い物しか出来ないんだよね。そうなると、トレーナーの役割って何があると思う？　まさか、しばらくニートするわけ？」
「ネイチャ……俺はお前だけの専属トレーナーで……」
「はいはい、ネイチャさんはそんな口説き文句には屈しませーん。ホントにあたしに遠慮しないで、チームに新人を入れましょうよ。トレーナーの今後の評価が悪くなるのは、ネイチャさんとしても申し訳ないっていうかさ…ねっ……？」
「ネイチャ……お前は本当に……うっ……ネイチャ～！」
「泣くほどなの!?」
　私より背の高い大人の男性が、グスグスと涙を流し始めた。そんな彼に私はドン引きする一方で、少しだけ刺激されてしまう母性に自分自身で少しイラついた。

　そんな時、この小さなドライブインに喧しい騒音が響き渡る。左右にフラフラと斜行しながら駐車場に入ってくる柄の悪い連中。一言で言えば〝ド低能のゴミクズ共〟だ。そんな数人のバイク集団が奏でるその音は、トレーナーのバイクとは違っていくらか下品な物だった。

「珍走か……今時珍しい……ネイチャ……目を合わせないようにしとけ」
「はいはい、まあ、いざとなったらこのネイチャさんに任せなさいな。あたし、ああいう奴ら嫌いなんだよね」
「落ち着け、触らぬ神に祟りなしって奴だ」

正直言って、ウマ娘は人間の男性１００人が相手でも決して負けないフィジカル的強さがある。骨膜炎による多少の足の痛みはあるが、負ける気はしなかった。そして、トレーナーの憂慮をよそに、下品なバイクから降りた四人が残念ながら私達へと近づいて来た。
「おうおう、オレのシマで仲良くデートか？　羨ましいねぇ」
「……」
「おい、男のくせにダンマリか？　はっ！　だらしねえクソ雑魚だな！　返事くらい出来ないのか!?」
「んだとコラァ！　ガキの癖に生意気言ってんじゃねえぞ！」
「トレーナーさんっ!?」
あれだけ落ち着けとかなんだとか言っときながら、私のトレーナーはかなり喧嘩っ早かった。全身を黒色の特攻服で固めた不良……恐らくこの集団のリーダーであろう存在に彼は思いっきりガンをつけていた。その姿に私は委縮するより先に、少し呆れていた。
「ほう、度胸はけっこうあるみたいだな。このオレを前にして動じないか」
「うっせわチビ！　誰がお前みたいなチビ助に動じるか！」
「あ〝あ〝!?」
「やーい、チービ！」
不良が目つきの悪い三白眼でトレーナーを睨み返す。そして、トレーナーは子供以下の煽りを不良に言い放っていた。そんな状況をよそに、残った三人の不良は抱き合って怯えていた。
「やべえっ、あの男、姉御の禁句を言いやがった！」
「落ち着きなさいコスモバルク！　流石のお姉さまも通りすがりの一般男性に手をあげるような事はしないはずよ」
「エイシンヒカリ先輩、あーし怖いッスよ～」
「貴方も落ち着くのよ。メイケイエールちゃん」
私は膠着した状況で動けずにいた。くだんの不良は運の悪い事に四人全員がウマ娘。流石の私も、彼女達には手出しをして勝てる自信はなかった。だが、私の大切なトレーナーの危機だ。だからこそ、痛む足を一歩前に踏み出して……

「つーか良いなお嬢ちゃん……よく見たらかなり有望そうなウマ娘じゃないか……」
「はあっ!?」
「小さいながらも鍛え抜かれたしなやかな足。なるほど、君も競走馬として頂点を目指しているんだな。こんな所でこんなにも素晴らしい素質を持ったウマ娘に会えるとは……もはや運命……」
「あっ……うっ……!?」
　みるみるうちに顔を紅く染めていく不良に私は少しカチンとくる。そして、同様に甘い言葉を私以外のウマの骨に言い放ったトレーナーにもイラッと来た。それは取り巻きの三人も同じだったようだ。
「姉御おおおっ！　流石にそりゃないぜ！　一昔前のレディース系不良漫画パターンは勘弁してくれ」
「そうよお姉さま！　その展開は手垢のついた古すぎる展開すぎです！」
「あーし、姉御が男に屈するとこは見たくないっす！」
　三人の声に私も思わずうんうんと頷いてしまった。そして、次の瞬間、私のトレーナーは予想外の行動に出た。彼は、ダボダボの特攻服の彼女に手を伸ばし、思いっきり太ももを撫でまわしていた。

「うーん……いい……素晴らしい……」
「ひゃうっ!?」
「おっ、なんだよ。あまり耐性がないのか？　ぐへへっ、決めたよ。俺がお前を最強のウマ娘に育てあげて……」
「調子乗ってんじゃねーぞこらあああああああっ！」
「あばーっ!?」
　どうやら蹴り上げられてしまったようだ。トレーナーは物理的に天高く舞い上がっている。そのまま地に落下したトレーナーはピクリとも動かなくなった。
「トレーナーっ!?」
「けっ、調子に乗るからだ。まったく、オレがそんなカワイイなんて……ぐぅっ！」

相変わらず顔の紅い彼女に私はトレセン学園で学んだ護身術の構えを取る。勝てるか分からないが、せめて一発は仕返ししてやりたかった。それを見た不良のリーダーは私を見て不敵に笑っていた。

「ひれ伏せ！　雑魚が！　オレは〝沈黙の日曜日〟のヘッド！　世界のステイゴールド様だ！　生意気な真似をした彼氏の責任は、彼女であるアンタにとって貰うか！」

「かかっ、彼氏じゃないって！　い、いきなり何を言ってくれるんだか！」

「んだよっ！　あんだけゲロ甘な空間作っといて……って……えっ……!?」

不良……ステイゴールドの三白眼がこちらをじっと見つめてくる。色白な肌と、艶のある黒髪を一本結びのおさげでまとめた彼女は、確かにトレーナーさんの言う通り、かなり鍛えられたウマ娘だった。

「もしかして、ナイスネイチャさん……？」

「えっ……？　んーっと……確かにあたしはナイスネイチャさんですよ？」

「!?」

ステイゴールドはまるで幻視できるほどのマガジンマークを浮かべていた。

そして、またも顔を紅く染めた彼女は、小声でボソボソと喋り出した。

「お、おう……あれだ……んー……ごほんっ！　わたくし、実は貴方の大ファンなんですのよ。サインを頂けませんこと？」

それが、私とアイツの初めての出会いであった。

勧誘

「おう、お前ら跪け。ここにおわすナイスネイチャ様は前年クラシックでは不知火特別、はづき賞、小倉記念、京都新聞杯を４連勝！　菊花賞は惜しくも４着だったがその後の鳴尾記念で優勝。あの年末の大舞台でも並みいる強豪相手に３着へ入着！　トーカイテイオーに並ぶとも言われる凄いウマ娘なんだぞ！」
「お～」
「ですです」
「っす……」
「あははー……どーもナイスネイチャでーす」

目をキラキラと輝かして私を見るウマ娘、ステイゴールドを前にして私は顔から火が噴き出るほど恥ずかしかった。小さい頃から勝負ごとには勝てず、徒競走だろうが学業だろうが３位ばっか取って来た私は自虐癖がつくようになってしまった。
そんな私を、あの手この手で鼓舞してくれたトレーナーのおかげで、私は〝夏の上りウマ娘〟として、今ではそこそこの期待を寄せられるようになっていた。
だが、ここまで面と向かってファンを名乗られるとやはり恥ずかしいものは恥ずかしい。これに関しては、商店街のみんなと接する時にも感じていた事だ。
「ネイチャ様、こいつらは……もう登場予定のないモブだから紹介は省くぜ！」
「いきなり意味不明の事は言わないでください姉御！　という事で改めましてコスモバルクです！　特技は斜行ですぜ！」
「私はエイシンヒカリですネイチャ様。特技は斜行です」
「あーしはメイケイエールって言うんだ。よろ～！　あっ、特技は斜行だよ！」

「ええっ……」
　どうしようもない特技を言い放った三人に引きつつ、私は彼女達の圧に飲まれかける。彼女達からはキラキラとした何かが感じ取れる。小さい頃から私は所謂〝主人公〟を見抜く目を持っていた。
　この三人が持っているキラキラとした輝きには目を見張るものがあった。だが、このチームのヘッドであるステイゴールドからはそういうキラキラはあまり感じられない。むしろ、彼女からは不思議な親近感を覚えた。
「つーかさ、アンタとあたしってそれほど年に違いはないんだし、ネイチャさんって気軽に呼んでよ。流石に、様付けはその……恥ずかしいかな」
「おうおう、流石ネイチャさんは謙虚だな！　それじゃあオレの事は気軽にステゴって呼んでくれや！　まったく、こういう謙虚な姿勢はあのトウカイテイオーも見習えってんだ！」
「まーたテイオーの愚痴ですか姉御……」
「うっせえ！　それより……すまなかったネイチャさん……いや姉貴！　彼氏さんとのデートを邪魔しちゃったみたいだな。オレも少しイライラしてたもんで……」
「だから彼氏じゃないし！　というか……トレーナーさん!?」
　今の今まで忘れていたが、そういえばトレーナーはステイゴールドことウマ娘に蹴り飛ばされたのだ。最悪、命に関わる一大事だ。だが、先ほどまで倒れていた場所に彼の姿はない。その代わり、両手にソフトクリームを持って物凄い笑顔でドライブインからかけてきた。
「なあ君達、ソフトクリームはいるか？　せっかくのネイチャのファンなんだ。お兄さんからの奢りだ」
「おう、わりいな！　ライダーは降り立った地でアイスを食うっていう鉄の掟があるからな」
「何その掟!?」
　私のツッコミがむなしく響き渡る。そういえば、トレーナーさんも似たような事を言っていた。そして、一心不乱にソフトクリームを舐め始めた不良達を横目に、私は相変わらず笑顔なトレーナーの身を案

じた。
「トレーナーさん、怪我はない？」
「まあな、トレーナーがこの程度でくじけるわきゃいかないから。それよりネイチャ。ちょっと大事な話があるんだ」
「大事な話……？」
「ああ、俺の愛するネイチャにとっても大事な話だ」
「んにゃっ!?　だからそういう事は気軽に言わないの！」
　火照る顔面をよそに、彼はその真剣な表情で私に顔を近づけていく。そして、まさかアレをしちゃうんじゃないかと身構えていた私に、彼は小声で呟いた。
「ごめんなネイチャ。俺、浮気するわ」
「はい？」

　私の理解不能という返事をよそに彼は必死にアイスをぺろぺろしているステゴに近づいていった。

「なあ、君。俺のチームに入らないか？」
「ああっ？　ヘッドのオレ様に別の暴走族の勧誘とはなかなかズブイ奴じゃねえか」
「そっちじゃない。俺はトレセン学園のトレーナーだ。見た所、おそらく君達もトレセン学園の生徒だろう？　競走バとして鍛えられたウマ娘だってのは見れば分かるさ」
　トレーナーの言葉を前にステイゴールドはソフトクリームをぱくりと一飲みにする。それから、薄い胸を踏ん反りかえしつつ、その特徴的とも言える三白眼を見開いて威嚇してきた。
「オレ様は世界最強のステイゴールド様だぞ！　誰かの下になんかつくわけねえだろ！」
　自信満々にそんな事を言うステイゴールドの姿はその小さな体躯も合わさって、私にとっても因縁の相手であるトーカイテイオーと姿

が少し重なる。だが、悲しい事にステゴからはテイオーほどの輝きが感じられなかった。
「さっきの蹴りを喰らった俺なら分かる。君の小柄ながらも優れた体幹と、蹴りに込められたパワーは目を見張るものだ。おそらく、素晴らしい末脚の持ち主だ」
「うっ、うっせーな！　何を言われてもオレ様は揺らがねえ！」
「まあまあ、釣れない事言うなって。俺はまだ経験の浅い新人トレーナーだが、いずれはネイチャを世界最強にする男だ。君も、ネイチャと一緒に励まないか！」
「っ……！」
　押しの強いトレーナーにステイゴールドは怯んでしまった。そして、彼女の三白眼が揺らいだ所を見て、私は直感が正しかった事が分かった。彼女は私と同じ、〝脇役〟だ。どれだけ虚勢を張ってイキっても、彼女は主人公になれる逸材ではなかった。
「悪いなクソ雑魚トレーナー。オレは新バ戦で二連敗、未勝利戦も三連敗だ。アンタはネイチャさんに専念してくれや。オレ様も応援してるからよ」
「トレーナーはついていないのか？　お前、社台家のお嬢様だろう？」
「チッ！　知ってやがったか……そうだよ、オレは一応は社台家の端くれだ。だけど、オレは実家には絶対頼らねえ！　お前みたいなクソ雑魚にも頼ってなんかやるものか」
　三白眼を見開いてそう言い切ったステイゴールドに、今度はトレーナーが怯んだ。だが、彼も負けてはいなかった。私を勧誘した時のような、ナンパモードに入ったみたいだった。
「なるほど、実家に頼らないか。だから、バンディッド４００に乗ってるのか。少し古いけど、良いバイクだ」
「うっ……なんだよ急に……」
「中古で買ったんだろう？　実家に頼んだら、もっと新しいのバイクを買ってもらえるはずなのに」
「はっ！　オレはあいつが気に入ったから買っただけだ！　新しいも古いも関係ねえ！」

「必死にバイトしてお金を貯めたんだろう？　バイク乗りが初めてのバイクを買う時、親の金を借りるなんてダサイ事出来ないからな」
　トレーナーの事を威嚇していたステゴは、少しだけ視線を落とす。そして、ほんのりと紅くなった頬を隠すようにそっぽを向いた。
「うっせよ……さっきから何なんだよお前は……」
「だから、トレーナーだ。もし、世界最強を目指すなら、後日俺の所に来てくれ。ほら、名刺だ」
「チッ……」
　トレーナーさんが渡した名刺を、彼女は意外にも素直に受け取っていた。そして、自信の黒髪をを苛立ったようにガシガシと掻いた後、彼女は私に一礼してから歩き出した。
「帰るぞお前ら。今日は少し峠を飛ばす気分じゃねえ」
「うーっす姉御～」
「まあアイスを食べるっていうノルマは達成しましたしね」
「あーしはまだ物足らないっすけど……しょうがないっすよね～」
　ぞろぞろと歩き出したステイゴールド達は、それぞれにいかついバイクへと跨り、下品なエンジン音を響かせ始める。だが、ステゴだけ何やら焦った表情を浮かべながら彼女へと近づいて行った。そして、それを見たトレーナーがニヤリとした笑みを浮かべていた。
「どうしたステイゴールド？　何かあったか？」
「いや、エンジンがかからなくてな……つーか気安く呼ぶんじゃえクソ雑魚トレーナー！」
「まあまあ、キルスイッチは確認したか？」
「キルスイッチ……？　ああ……本当だ……オレとした事がこんな初歩的なミスを……」
　今度こそエンジンを点火してバイクをふかし始めたステゴを、トレーナーは優しく見守っていた。だが、彼は何かに気づいたように彼女のバイクの下を確認し始めた。
「クソ雑魚トレーナー、あんま近いとこにいるとひき殺すぞ」
「まてまて、お前のバイク関する大事な話だ。どうやらエンジンオイルが垂れてるみたいだな。下に染みが出来てるぞ」

「えっ……それは……それはなんかマズイ事なのか……？」
「俺も断定は出来ないが、こいつはオイルパンの交換が必要かもな。低く見積もっても修理には5万はかかるかもな……」
「五万……!?　そんな金がかかるものなのか!?」
「多分だがな。後、少量のオイル漏れだからしばらくは乗れるだろうが、放置するとエンジンがオーバーヒートして最悪の場合バイク自体がダメになるぞ」
　トレーナーさんの脅迫するような声にステゴは怯みつつ、バイクを降りて駐車場に出来たオイル染みを確認する。そして、少しだけ涙目になりながら、彼女はバイクをいたわるように撫でていた。そんな彼女に、トレーナーはそっと囁いていた。

「レースに勝てば儲かるぞ。少なくとも、そいつを直すくらいは簡単に稼げるぞ～？」

　悪魔の囁きを行ったトレーナーから、ステゴは顔を逸らす。そして、逃げるようにバイクに跨ってエンジンをふかし始めた。
「うっせえバカ！　誰がお前みたいなクソ雑魚の下につくか！」
　そうして、爆音を奏でながら去っていった四人を私は仏頂面で見送る。トレーナーはと言うと、懐から取り出したレンチをくるくると手で弄びながら、ニヤニヤとした気持ち悪い笑顔を浮かべていた。

「トレーナー、あの子のバイクに何かしたの？」
「いやいや、してないしてない。それより、放置して悪かったなネイチャ。デートの続きしようぜ！」
「だからデートじゃないですし!?　そういういい加減な態度はネイチャさん的には減点だから！」
「へいへい、可愛い可愛い！」
「トレーナーさんってば本当に……！」
　相変わらず軽い調子のトレーナーにイライラしながらも、不思議と私の胸の中は何とも言えない暖かさに包まれた。一方で、少しだけ背

に薄ら寒い物を感じた。それは、彼がステイゴールドを口説いていた時にも感じた不思議な感覚だった。だからであろうか、気が付けば私は彼の腕をぎゅっと抱き寄せていた。
「夕御飯、トレーナーさんの奢りだから」
「当然だろ。そうだな、箱根の温泉街にでも出向くか！」
「んにゃっ!?　チケットも当ててないのに温泉……!?」
「急にどうした!?　チケットって何の話だよ!?」
「な、なんでもないからっ！」
　彼に腕を強引に取りつつ、私はチクリと痛む胸にわけもわからず顔を少しだけしかめた。そうしてお互いにヘルメットをつけて同じバイクへ乗り込む。そうして、ゆっくりと走り出す。レースの時と同じような肌を風で撫でる感覚はやはり心地良かった。
『社台家のウマ娘がここらで燻ってるって情報は確かだったみたいだな。後は網にかかるかだが……』
　おそらく独り言だったのであろう。インカム越しに彼の下卑た声が小さく聞こえてきた。

カチコミ

「んしょ……んしょっ……」

３０キロダンベルを上げ下げしながら、私は下肢の柔軟を行う。本当なら気持ち的にも訓練的にも外で走るのが一番なのだが、今の私はそういった練習は医者にもトレーナーにも止められていた。

「あんまし入れ込みすぎるなよ。夏が終わるまではしっかり休めって言われただろ？」

「んーそれはあたしも分かってるけどさ。やっぱり少しは身体を動かさないとストレスが溜まるんだよね。まーあれだね。これがウマ娘の本能ってやつかな。悲しいさがだねえ」

「何を悟ってるんだか……しっかり休憩は取れよ」

「はいはい、分かってますとも」

私とトレーナーさんの声が小さな部屋の中にこだまする。まだ新人である彼に部室は準備されていないため、こうして練習以外で集まる時は彼のトレーナー室を利用していた。ほっとくとすぐ散らかるこの部屋を整理整頓するのは私の役割であり、誰にも譲れない仕事だった。

「ふい～ちょっと休憩。冷蔵庫開けて言い？」

「許可なんていらねえよ。いつも通り勝手に使ってくれ。それと、ネイチャが食べたいって言ってた巷で有名なケーキ屋のシュークリームも買っておいたぞ。食え食え～」

「いやあのさ、気持ちはすごーく嬉しいんだけど……流石にこれを食べたら……ううっ……！」

「体重を気にするのは分かるが、ちょっとくらいなら大丈夫だろ」

「そのちょっとが危ないんだよトレーナーさんや」

「お、おう……」

語気が強くなるのも仕方のない事だ。普段なら走り込みをしているからと、一つくらいはつまんでいたが今は療養中。復帰した時に腰に勝負服が通らないような無様な体型にはなりたくなかった。だからこそ、シュークリームに伸びる手を鋼の意志で止める。その代わり、常備していたミネラルウォーターに手を出した。
「そういえばトレーナー、最近おかしくない？」
「急にどうした？」
「いやさ、最近いつにも増してニヤケ面が増えたとか、ちょっと煙草臭いとか色々言いたいんだけど……やっぱり格好が変な気がする。何と言うか、ダサイよね」
「ひでえ！　まさかネイチャまでコ○ネを馬鹿にするなんて……」
「メーカーまでは知らないけど、どうみても室内着じゃないでしょ」
私の指摘に、トレーナーは項垂れる。ちょっと前までは着古したジャージを愛用していたのに、ここ数日は目に痛い赤色のウェアを着込んでいた。それがバイク用の服である事は分かるが、何故そんなものを屋内で着ているかが分からなかった。
「ネイチャ、俺がコ○ネマンになったのも悲しい理由があるんだ」
「はあ……」
「俺は近いうちに死ぬかもしれないんだ。だから少しでも生存率を上げてるだけだ」
「ふーん……なんだか分からないけど、頭の病院行く？」
「結構辛辣だな！　少なくとも普通の病院にはお世話になるかも……ってこの話はこれくらいにして、ほらよ！　今月の食事代だ！」
そう言ったトレーナーから手渡されたのは一つの封筒だった。そして、中身を見て思わずうげっとした声が漏れてしまう。そこには、諭吉さんが何枚も入っていたのだ。それはチームに所属するウマ娘が一月に与えられる食事代の上限の額であった。
「またこんなにいっぱい……太らそうとするのはやめてよね」
「一応は食事代という名目だが、好きに使って構わないって言ったはずだ。怪我は残念だが、少しくらい豪華な食事を食べたり、趣味にお金を使ってみたらどうだ？」

「んー……でもなー……あたしとしてはちょっと前までこんな大金とは無縁だったから……うーん……」
「いらないなら別に返して貰っても構わないぞ。学園に返納するだけだし……こんな額でも、ネイチャが今までに稼いだ賞金と比べたら雀の涙も良い所だからな」
そう言って微笑むトレーナーに私は苦笑いを返した。ウマ娘がレースに勝利した時に得られる賞金は結構な金額だとされている。それに加え、ウイニングライブでの収入やグッズ代が加算されると、デビュー戦を勝利するだけでも結構な金額が動くそうだ。
だが、その一勝で得た賞金で満足し、結果的に潰れてしまったウマ娘も多いという。また、賞金を得るために体調不良を押してレースに出走したり、連続出走を行い、それが原因での怪我を負って競争生活を終えてしまったウマ娘もいるそうだ。
その結果、このトレセン学園の生徒が得た賞金は競争生活を引退するまでは学園側が管理するパターンがほとんどだ。別に申請すれば賞金は貰えるのだが、それで競争生活が狂ってしまった先輩方の話は一種の怖い話としてウマ娘達に語り継がれてきた。
そんな私も、引退までは賞金の管理を学園側に任せている。月に一回、お母さんが私の口座に振り込んでくれるお金をお小遣いとして使っていた身としては、これは手に余る金額だった。
ちなみに有り余る引退資金を使ってあの手この手で見初めた相手を囲い込むウマ娘も多いという眉唾な噂話もあったりする。
「トレーナー、あたしの奢りにするからちょっと豪華な晩御飯でも食べに行く？」
「おいおい、流石にそれはトレーナーとしても男としても受け入れられない提案だな」
「ですよねー！　でも、トレーナーさんも意外と真面目だねえ……」
「もう長い付き合いになるんだからネイチャも理解してるだろう？俺が真面目なわけないだろ！」
「それ別に自慢気に言うことじゃないからね!?」
満面の笑みでどうしようもない事を言いながらサムズアップする

彼には呆れてしまうが、彼との会話は不思議と苦にならない。むしろ心が弾んでしまうのを感じられる。この感情が一体何を示すのかは、今はあまり知りたくはなかった。

　そうして少しセンチな気分になっている時、ふと私のウマ耳がトレセン学園には似つかわしくない下品な音をとらえる。彼もその音に気付いたのだろう。表情を少し強張らせながら、急に床に這いつくばって亀のように体を丸め始めた。

「トレーナーさん……？」

「ネイチャ、俺に構わず逃げろ。もし死んだら骨だけでも拾ってやってくれ」

「トレーナーさん!?」

　意味不明な行動を取り始めた彼にドン引きしているうちに、トレーナー室の扉がドカンと蹴り破られる。そこには、数日前にツーリング先で遭遇したステイゴールドの姿があった。だた、あの時と比べても随分と機嫌が悪いようだ。文字通り、額に青筋を立てていた。

「カチコミじゃクソボケえええええっ！」

　そう叫んだ彼女は私の姿を視界に捉えてすっと表情を真顔に戻した。

「おう、驚かしてすまないネイチャの姉貴。あのクソ雑魚トレーナーはいるか？」

「えとっ……そこで丸くなってる……」

「はあ？　っておいおい！　本当に丸くなって怯えてやがる。まるで何か心当たりがあるみたいじゃあないか」

　ツカツカと部屋に入って来た彼女は無言で丸くなっているトレーナーの背中に片足を乗せる。それでも、一言も喋らなかった彼だが、ステイゴールドがグリグリと足先を動かす度に、ぐえっという苦悶の声が聞こえてきた。

「あの後、バイク屋に寄ったんだけどよ。どうも、あのオイル漏れは誰

かが人為的にやったんじゃないかって整備士のおっちゃんが教えてくれたんだ。そう考えると、状況的に怪しいのはお前しかいねえんだわ。理解出来たかクソ雑魚？」
「うっ……本当に俺だと思うか……？」
「はっ！　てめえに決まってるだろ！　だって、あの時のお前は少し変だったしよ！」
「本当にそう思っているのか？　俺以外にそういう仕返しをしでかす候補者はいないのか？」
「な、なんだよ……」
「もしかしたら、つるんでた連中の誰かかもな。不良の世界は案外陰湿だしな」
「アイツらがそんなことするわけ……ない……ないだろ……」
　トレーナーを足蹴にしながらも、少し涙目になってしまった彼女に私は思わず同情する。そして、想像以上の外道であった彼に私はまた一つ幻滅してしまった。
「まあ安心しろステイゴールド。あれは俺がやった事だ」
「そ、そうなのか!?　良かった……ってやっぱりお前かあああああっ！」
「おぐっ!?」
　ステイゴールドに蹴り上げられたトレーナーは、丸まった状態で壁に激しく激突する。そのまま、白目を向いてしまった彼にツカツカと歩み寄る彼女を、流石の私も止めざるを得なかった。
「ちょい待ち！　貴方の怒りは理解出来るけど、流石にこれ以上は勘弁してくれない？　こんなんでも、一応あたしのトレーナーだからさ」
「でもよ姉貴！　こいつはオレのバイクに……！」
「だから、ごめんなさい。全部、このバカせいだから。あたしはバイクの事はよく分からないけど、これで足りるかな。足りないなら、あたしからも追加で出すから」
　私が差し出したのは、先ほどトレーナーから貰った〝食事代〟であった。仏頂面で私から封筒を受け取ったステイゴールドは、中身を

見て目を丸くする。そして、何かに葛藤するように数分間唸っていた後、彼女は封筒を私へと突き返してきた。
「確かに金は必要だけど、姉貴からは受け取れねえよ……」
「大丈夫、大丈夫！　こういうとこは遠慮する場面じゃないの。悪いのは全面的にこのバカトレーナーじゃん。それに、そのお金はこのバカから貰って持て余した〝食事代〟だしね」
「う……くっ……！」
　ステイゴールドはしばらく葛藤の時を過ごし、結局はそれを懐へと入れた。それを見て私も少しだけ安心する。正直言って、この手の沙汰は現金による弁償以外に何も出来そうになかったからだ。そして、落ち着きを取り戻した彼女はと言うと、何故かいまだにトレーナー室をうろうろと歩き回っていた。そして、時折、私や倒れ伏すトレーナーへとチラチラと目を向けていた。
「どしたのステゴ、何か忘れ物？」
「いや、別にそういうわけじゃないんだけどよ……」
「だけど？」
「ううっ……」
　そのまま固まってしまったステイゴールドを見ながら私は溜息をつく。彼女が何を求めているかは薄々理解出来る。しかし、それを口に出すのは私にとっても勇気が必要だった。それは、今の安定した環境の変化を意味しているからだ。
「なんつーかアレだ……オレってちゃんとした勧誘受けるのは初めてでよ……そりゃあ選抜レースも散々だし、新バ戦は負けるし……」
　顔を伏せるステイゴールドに私は何と言っていいか分からなかった。メイクデビューに関しては私も1位で通過した身だ。彼女には私お得意の自虐ネタも通用しない。むしろ、煽りとして受け取られてしまう可能性もあるだろう。こうして、私達はしばらく気まずい沈黙を過ごす。しかし、そんな空気もボロボロになりながらもフラリと現れたバカトレーナーのおかげで消え去った。
「ステイゴールド、やっぱお前の蹴りはすげえよ。もう一発喰らいたいくらいだ」

「チッ……！　生きてやがったか！　つーか気持ち悪い事言うんじゃねえよ！」
「まあまあ落ち着け。前に勧誘した時、俺がお前の事を社台家のお嬢様って把握してたよな。それが意味している事は賢いお前なら理解できるはずだ」
「な、なんだよ……」
「俺はお前を勧誘しようと、以前から目をつけてたってわけだ。だから、改めて言おう。俺達のチームに入らないか？　後悔はさせないつもりだ」
　トレーナーの声に彼女は少しだけ顔を伏せる。だが、顔を上げた時には彼女お得意の自信満々な表情を浮かべていた。
「はっ！　まあネイチャの姉貴には色々と教わりたいからな。だから、仕方なく、仕方なくだ！　仕方なくはチームに入ってやるよ！　決してお前みたいなクソ雑魚トレーナーになびいたわけじゃないからな！」
「ああ、分かってる……これからよろしくな！　ステイゴールド！　ところでネイチャ、ここにステゴの新バ戦の時のパドックインタビューの映像があるんだが……」
「あっ、てめえ！　よこせ！　そのスマホをよこしやがれ！」
「いでででっ!?　俺はお前の雄姿をネイチャに見て貰いたいんだよ！」
「わざとだろ！　てめえ絶対わざとやってんだろ！　それは反則だろうが！」
　早くも息のあったように取っ組み合いを始めたトレーナーとステイゴールドの姿を見て、私は溜息をつく。そして、随分とうるさくなってしまったトレーナー室に少しだけ嫌気が差した。
「そっか……もう二人きりじゃないんだ……」
　私の口から漏れ出た言葉は、顔を真っ赤にしたステイゴールドに腕

を噛みつかれたトレーナーの悲鳴に打ち消された。

未勝利戦

今日も今日とてトレーナー室の扉をくぐった私は思わずため息をついてしまう。いつもならば、出迎えてくれるのは笑顔のトレーナーさんだった。だが、今日の出迎えは不機嫌そうなステイゴールドだった。おまけに、彼女はうつ伏せに倒れているトレーナーをげしげしと足蹴にしていた。

「あのさ、だから言ったじゃん？　そんなんでも、一応はあたしのトレーナーなんだけど」

「わりいな姉貴。でも、こいつがオレに何の相談もなしにレースの出走登録をしてたみたいでよ。それが少しイラっとしてな」

「イラついただけで、いちいち暴力は振るわないの！　まったく……」

「お、おう……」

自然と強くなった語気のせいか、ステイゴールドはトレーナーから足をどけて一歩下がる。そして、私が出した手を彼はよろよろと握り、ふらつきながら立ち上がった。

「すまんなネイチャ……お前にはいつも苦労をかけてるな……」

「それは言わない約束だよトレーナーさんや……って少しは余裕あるみたいね」

「まあガキの癇癪に付き合うのも大人の務めだ」

「ガキって言うな！　これでも今年から高等部だ！」

顔を赤くして怒る彼女だが、私と比べると一回り体躯が小さいため威圧感はそれほどない。ただ、目つきは相変わらず悪かった。

「それでトレーナーさん、今日はどうするの？」

「ああ、ネイチャはいつも通り軽いトレーニングに抑えて、ステイゴールドは……何する？」

「それを決めるのが仕事だろクソ雑魚トレーナー！」

「トレーナーさん……」

随分といい加減なトレーナーにステイゴールドだけでなく私も少

しガックリときた。しかし、彼は何故か自信満々でステイゴールドに近づき彼女の耳元で何かを囁いた。
「いいか、よく聞けステイゴールド。トレーニングはさておき、今からお前だけにとっておきのレース必勝法を教えてやる」
「ああん？」
「それはな――」
「ほうほう……」
二人でこそこそと何かを話す彼らを私はじっと見守った。反発されても動じないトレーナーと、難しい性格だが意外と素直な所もあるステイゴールドは今のところ順調に関係を築いている。私もそろそろ気持ちを切り替えなくてはいけない。子供じみた嫉妬の感情はレースに勝つためには不要なのだから。
「しかしステイゴールド……」
「おう、どうした？」
「お前のウマ耳、なんか不思議な匂いがするな」
「おいおい、これは驚いた……まさか蹴られたいがためにそんな事を言ってるのか？」
「安心しろ、臭くはない！　不思議な匂いだ。そうだな、あれは俺が北海道を旅した時に……」
「少しはその臭い口を閉じろクソ雑魚トレーナー！」
「えっ、俺の口って臭いのか……？」
「自覚ないのか？」
「……」
相変わらず喧嘩の絶えない二人に、私はもう一度溜息をつく。一方で、それはそれとしてやっぱり悔しかった。ほんの少し前まで、あのようにトレーナーと軽口を言い合っていたのは私だった。それが今では蚊帳の外だ。
「はあ、何を考えてるんだが……落ち着けあたし！」
ついに取っ組み合いをし始めた彼らをよそに、私は自分の頬を打っ

て気合を入れる。今の私の仕事は身体をなまらせずに回復させる事。それだけであった。

　それから、グラウンドに場所を移した私達は各々のトレーニングに勤しんだ。私は無理のない速度での歩行を続け、ステイゴールドもレースが近い事もあってか軽いランニングを行っていた。しばらくの時間が経過し、水分補給に向かった私にトレーナーは笑顔で水の入ったペットボトルを手渡してくる。それを受け取りながら、私はそっと彼の脇腹を指で突いた。

「いてっ……ああっ……ネイチャまで俺に攻撃的に……！」

「軽いイタズラですー……それよりトレーナーさん、一つ聞いていい？」

「んっ、なんだ？」

「どうしてステイゴールドをチームに引き入れたの？　あの子ってなんかこう……難しそうな子じゃん？」

　そんな事をトレーナーに質問してから、少し自己嫌悪に陥る。もう、言ってしまったのだからしょうがないが、少し嫌味っぽくなったかもしれない。トレーナーはというと、久しぶりに真面目な表情で考えこんでいた。

「勧誘理由は一つには絞れない。でもな、俺はアイツの強みを学べればネイチャが今以上に飛躍できると考えたんだ。逆もまたしかりでアイツにネイチャの強みを学んで欲しかった。まあ、あれだ。結構相性良いだろ？　ネイチャとアイツは」

「あははっ……まだまだ壁はありそうだけどね……」

「安心しろって、ネイチャのコミュ力ならすぐに友達になれるさ」

「簡単に言ってくれますなー……トレーナーさんは……」

　笑顔でサムズアップする彼を前に私は肩をすくめる事しか出来なかった。そして、グラウンドの周回に戻った私に後ろから走って来たステイゴールドが横につく。少し前まで気だるげにランニングをし

ていた彼女の表情は、今では弱々しく不安そうなものになっていた。
「なあ姉貴……」
「どしたのー？」
「オレ、今度のレース勝てるかな……」
「ええっ!?」
　トレーナーの前ではあれだけ自信満々だったのに、私には少し素直なようだ。そのギャップじみたものに胸がキュンとしてしまうが、私は冷静に答えを返す。それが先輩としての務めであった。
「トレーナーさんはまだ経験は浅いけど、あたしを重賞ウマ娘をしてくれた。だから、彼の指示をきちんと聞けば、未勝利戦くらいよゆうよゆうー！　まあ、頑張りなさいな……未勝利戦だけは三着じゃ何の意味もないからね」
「姉貴……うん……見ててくれ！　今度こそ絶対勝つからよ……だってオレはステイゴールド様だからな！」
「はいはい、応援してるからね」
　表情を自信満々に戻し、高笑いをしながらグラウンドを駆けて行くステイゴールドを見送る。彼女の性格はこの短期間で大体理解出来た。少しだけ不安だったが……根は良い子なのであろう。私の足取りは自然と軽くなった。

　それから約二週間後、ステイゴールドは東京レース場で芝２４００ｍの未勝利戦に挑んだ。直近の未勝利戦で２着であり、名門社台家の出身である彼女はファン投票で一番人気。結果は……

『ステイゴールド先頭！　ステイゴールド先頭でゴールイン！』

　実況音声はステイゴールドの勝利を告げていた。そこそこの歓声が上がる中、私の隣で観戦していたトレーナーは笑顔でガッツポーズ

を取っていた。
「うし……うーし！　ネイチャに続いてステイゴールドも無事デビュー！　安泰！　これで俺の今後も安泰だぞー！　ぐへへっ流石は社台家のウマ娘！」
「トレーナーさん……？」
　少し生々しい事を言いながら喜びを吠えるように叫んでいたトレーナーには少し引いた。そして、レース場のターフビジョンに勝利後インタビューを受けるステイゴールドの姿が写る。彼女は、やはり自信満々な勝気の笑顔を浮かべていた。
『ステイゴールドさん、これで初勝利となりましたが……』
『勝った……勝ったぞチクショウ！　見てるかクソ雑魚トレーナー……やっぱオレは最強だな！」
『ステイゴールドさん!?』
　もの凄く傲慢な事を言いながらも喜びを示す彼女を周囲の観戦者も笑顔で祝福していた。そして、相変わらず自信満々な様子でインタビューを受ける彼女に私は少しだけ感心した。
「ねえ、トレーナーさん……あたしが彼女から学ぶべきことって……」
「クソ雑魚トレーナー！　打ち上げ行くぞ打ち上げ！　高級肉くらいは奢れや！」
「いつの間にここに……ってお前はウイニングライブがあるだろ。希望通り肉は食わしてやるから、準備しろ準備！」
「はっ！　あったなそんなお遊戯もよ……面倒くせえな！」
「おいおい……」
　私の話は途中で乱入したステイゴールドに遮られた。そして、面倒くさがる彼女を言葉巧みに説得するトレーナーを見ていて、何だか少しだけ胸が痛くなった。その感覚に首を傾げながらも私は押し黙って彼らのやり取りを見守った。
「いやー門限ギッリギリ……寮長って怒ると怖いからねー」

「姉貴もアイツが苦手なのか？　オレもよ、どうもフジキセキ先輩の耳が親父の愛人と似てて苦手なんだわ……」
「いきなり変な話しないでくれる!?　ていうか愛人って……」
「ああ、うちの親父は物凄く優秀なんだけどちょっとアレな性癖でな。入り婿として社台家に取り入ったのも……まあこの話はまた今度だな」
　げんなりした様子のステイゴールドに少し闇を感じながらも、ちょっと次元の違う話に彼女とは育ってきた環境が違うのだとひしひしと感じた。そして、視線を少し後ろに移すと顔面蒼白なトレーナーがとぼとぼとした足取りで歩いている。その姿に私はクスリと笑ってしまった。
「トレーナーさん、大丈夫？」
「大丈夫じゃない……打ち上げで経費の上限を超えちまったからな……自腹……自腹かあ……」
「トレーナーさん……」
「ああ、あの和牛、値段の割にそんなに美味しくなかったな。次はもっといいの頼むわクソ雑魚トレーナー！」
「お、おう……」
　元気のないトレーナーに私は同情しながらも思わず内心で微笑んでしまう。頑張ってる彼には、今度はご飯でも作ってあげようと私はそっと心に決めた。
　そして、ウマ娘達が住む寮の門へと近づいた時、入り口にウマ娘が立っている事に気づいた。最初はフジキセキ先輩かと思ったが、栃栗毛のボサボサの長髪を見て彼女ではないと悟る。そして、隣を歩いていたステイゴールドは急にぶるぶると震え出した。
「お帰りステイゴールド。やっと帰って来たわね。未勝利戦も、ウイニングライブも見事だったわ」
「あ、ありがとうございます……サッカー先輩……なんだか口調がいつもとちが……イタタっ!?」
「あらあら、私はいつも通りよ。そうでしょうステイゴールド？」
「うっ……うっす！」

出迎えたウマ娘はステイゴールドの腕をガッチリと握って自分の方へと引き寄せる。そして、私とトレーナーの事を値踏みするように見つめた後、クスリと微笑んだ。
「貴方が噂のナイスネイチャちゃんね。私、この子と同室のサッカーボーイよ。今後ともよろしくね」
「あっ、はい。あたしはチームメイトのナイスネイチャです。よろしくお願いします」
「ふふっ、礼儀正しい子ね。トレーナーさんもよろしくお願いしますね？」
「よ、よろしくお願いします！」
何故かステイゴールドと同じく怯えた様子のトレーナーに首を傾げる。私が見る限り、優しそうな先輩に見える。それに、彼女の競争成績はウマ娘なら自然と耳に入る。確か、オグリキャップ先輩と同時期に活躍してマイルG1を勝利しているトップクラスのウマ娘だったはずだが……
「それじゃあステイゴールド、お部屋でお祝いしましょう？　色々と準備してあるから」
「こ、光栄です！」
「ふふっ、おめでとうステイゴールド」
「うっす……」
そのまま、サッカー先輩に引きずられるようにして寮の中へと消えていったステイゴールドを見送った。そして、私も寮へと足を踏み入れる。トレーナーさんとはここでお別れだ。
「それじゃあまた明日トレーナー……ってまだ震えてるの？　優しそうな先輩だったじゃん？」
「いや、確かにそうだけどトレーナー同士の噂では……まあうん、明日もよろしくな。後、トレーニングの時間以外も、暇があったらアイツの面倒を見てやってくれ。頼むぜナイスネイチャ先輩」
「はいはい、任されましたよーっと。それじゃ、ばいばいトレーナー！」
「おう、またな」

手を振るトレーナーに私は軽く手を振り返しながら、決意を新たにする。私も、ステイゴールドの先輩だ。カッコ悪い所は見せるわけにはいかなかった。

「頑張れあたし！」

私はそう口に出して気合を入れた。

テイオーの相談

「んっ……」

ぼやける視界が少しずつ鮮明になっていく。重たい頭を揺り起こし、ベッド近くの目覚まし時計を確認する。時刻は１０時。休日とはいえ少し遅い起床であった。

「ありゃ、マーベラス時計は……んー不発かー」

今は主のいないベッドを横目に私はあくびをしながら独り言ちる。同室であるマーベラスサンデーの姿はすでにない。そういえば、昨夜は外へ出かける予定だと言っていた。しばらく何もすることもなくぼーっとしていたが、せっかくの休日を無駄にしまいと私はのっそりと起き上がる。

「何しようかな……」

ここ最近は怪我のせいでトレーニングを止められていたため、時間は割と有り余っていた。おかげで、遊ぶ時間も以前と比較すると増えてきている。だからと言って、日々練習に励んでいる友人を遊びに誘えるほど私は振り切れていなかった。もちろん、誘われれば付き合うが、私から〝サボリ〟のお誘いが出来るほどの勇気はなかった。

「トレーナー……暇かな……」

私の休日はトレーナーも基本的には休日である。だからであろうか、私は自然と休日も彼と顔を合わせる事が多かった。別に、彼に会いたいという思いが限界突破してるとかではなく、純粋に彼の事が気がかりだったのだ。

トレーナーとしての指導力と戦術眼はある程度信頼しているが、私に歯の浮くようなセリフを吐いたり、普段の言動がちゃらんぽらんな所は正直言ってあまり好きではない。

でも、時折見せる優しさには少し動揺してしまうし、彼が本気で私を勝利を導こうと尽くしてくれていることはよく知っている。そんな彼はやっぱりというか私生活がダメダメだった。給与だって平均よりかは得ているはずなのにいつも金欠であるし、部屋の片付けも出来ず食事もカップラーメンやレトルト食品ばかり食べている。何と言うか、そんな彼の姿を見てると私は呆れる一方で……

「って、それじゃあアタシ、ダメ男にハマる典型的な女じゃないかい！」

ビシっと一人ツッコミを入れてから私は大きくため息をつく。それから、スマホを取り出してトークアプリに『暇だから遊びに行っていい？』と打ち込んで彼に送信した。返事は待たず、私は身支度を整える事にする。面倒くさがりのトレーナーは既読スルーの常習犯であり、素早い返事は期待していなかった。

「い、いちおうお風呂入っとこうか……うん……別に深い意味はないけど」

どうせなら、綺麗な状態で彼に会いたいというのはウマ娘だからというわけではなく、私が女である事のあかしとも思えた。

ふと、そんな風に一人で舞い上がっていた時、私のウマ耳が扉からのノック音をとらえる。同室のマーベラスならノックはしない。つまりは来客の知らせであった。一体誰であろうか思いながらも、扉を気軽に開けた。そして、扉の前で待っていた少女を見て、私は思わずうげっとした表情をしてしまった。

「ねえねえ、ネイチャっていまヒマかな？　ボク、ちょっと相談したいことがあるんだ」

いつもの傲慢不遜な態度こそないが、彼女こそ私の苦手とする〝主人公〟トウカイテイオーであった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「それで、あたしに相談ってなに？　言っておくけど、レースに関しての相談なら御門違いだからね？」

「………」

「あのー黙ってたら相談もなにもないじゃん……まったく……」

ウマ耳を少し伏せながら押し黙るテイオーに私は肩をすくめる。それから、安心させるように彼女の横へと腰かける。テイオーはそんな私を伏し目がちにちらっと見てきた。

「はあ……どしたのテイオー……なんだか知らないけど、このネイチャさんに言ってみ？　言葉として吐けばすっきりする事もあるからさ」

「うん、いきなり押しかけてごめんねネイチャ……」

「いいっていいって、若いもんのためにはネイチャさんも一肌脱ぐから」

「ふふっ、ボクと同い年のはずなのにネイチャったらおかしいんだ」

くすくすと笑うテイオーにいつもの調子が戻る。それから、彼女は少し逡巡した後、ゆっくりと口を開いた。

「ボクね、最近少し身体がおかしいんだ」

そう呟いたテイオーに私が真っ先に危惧したのは怪我の事だと思った。テイオーの足の調子があまりよくない事は大々的な報道もあって世間でも知られる事である。だが、彼女の表情を見てそれは違うと悟る。テイオーが浮かべた表情をどう表現すべきかは分からない。ただ、一言で言ってしまえば、彼女は〝女の顔〟をしていた。

「ボクってさ、無敗で三冠を取ったんだよね。ネイチャも知ってるでしょ？」
「いやいや、いきなり嫌味ですかいテイオーさん……」
「ふふーん！　嫌味に聞こえちゃった？　ごめんねネイチャ！　でもね大事なのはそこじゃないんだ。ボクがクラシックで三冠を取って、カイチョーもいっぱい褒めてくれたし、トレーナーもいっぱい撫でてくれたんだ。だからね、とっても嬉しかったんだけど……その時から少し身体がおかしいんだ……」
　そう呟くテイオーは足をブラブラと揺らしている。私はやはり足のケガかと思ったが、そうではないらしい。テーピングも怪我の処置もその両足にはされていなかった。
「ボクの足は日本ダービーが終わった後、あまり調子が良くなかったんだ。だけど、トレーナーがそんなボクのために色んな事を……本当に尽くしてくれたんだ。おかげで無事菊花賞に出走出来て無敵のテイオー様になれたんだけど……最近、トレーナーを見てるとなんだか身体がポカポカしてトレーニングに身が入らないんだよね」
「テイオー？」
「それだけなら、ボクにとっては軽いハンデみたいなものなんだけどさ。今はトレーニング以外の時もトレーナーの事が頭から離れないんだ。だからいつも胸が苦しくて、以前はカイチョーと会いたいって時もこんな事があったんだけど、それとは少し違うんだよね」
　ため息を吐きながらそんな事を言うテイオーに私は絶句する。正直言って彼女に悪戯でもされてるのかと思うほど、彼女の話は単なる惚気話であった。だが、彼女自身、その思いに気づいていないのは本当なようだ。前々から子供っぽいとは思っていたが、彼女の思考はやはりお子様であった。
「最近、ぼーっとする事が多いんだよね。そんな時はやっぱりトレーナーの事を考える時なんだ。だからボク、トレーナーに会いたくて会いたくて仕方なくていっぱい撫でて貰いたいから彼についつい抱き着いちゃうんだけど……」
「ちょい待ちテイオー！　ストップ！」

「どうしたのネイチャ？」
「話が脱線してるからね……それで……結局相談ってなんなのさ？
トレーナーさんが気になっちゃうってこと？」
止まらないテイオーを静止した私は思わず自分のおさげを触りながら気を落ち着かせる。正直言ってしまえば、これはいわゆる〝恋バナ〟だ。何故そんな話をテイオーが私に……と思っていたら彼女は懐から一冊の雑誌を取り出した。
月刊トゥインクルと銘打たれた雑誌をテイオーは中ほどまで開き、私に見せてくる。そこに小さく掲載されていたコラムを見て私は思わず色々なものを吹きそうになった。

「な、なによこれ！」
「え？　どったのネイチャ？　ボクをこれを見て羨ましいなって思って……だから相談はネイチャにって……」
「あーもう……うにゃーっ！」
「ネイチャ!?」
私は思わず両手で自分の髪を掻きむしる。テイオーが驚いた表情を浮かべているが、今はそれどころではない。恥ずかしさで死にそうだった。それもそのはず、小さなコラムとは言え、恥ずかしさで憤死しそうな内容が雑誌に掲載されていたのだ。

期待のウマ娘〝ナイスネイチャ〟とトレーナーの微笑ましい関係
好成績の背景には手作りのトロフィー……？
ナイスネイチャをよく知る友人？氏を直撃！
商店街は見た！　彼女とトレーナーのお散歩デート!?
記者：それでは？さん。この噂は真実なのでしょうか？

？氏：マーベラス！　真実も何もウマ娘の間では有名な話だよねー！　しかも毎晩クローゼットの……

「うにゃーっ!!」
「ひゃああっ!?　急に何するのさ!?　ボク、まだ全部読んでないのに！」

思わず雑誌をバラバラに引き裂いてしまった。恥ずかしさで頭を抱えながら私は行き場のない思いを地団太を踏むことで解消する。そういえば、最近、私の事を遠巻きにひそひそと話す同期たちがいた。その好奇な視線は怪我によるものかと思っていたが、今更ながら理解する。彼女達は〝これ〟を見たのだろう。

「なんで、なんでこの話が表に……マーベラス……ユルサナイ……！」
「まあまあ、落ち着いてネイチャ。それよりさ、やっぱりこの話は本当だったんだ。それなら……クローゼットはここかなー？」
「えっ、ちょい待ちテイオー！　そこは……！」
テイオーの手によってずばんと開け放たれるクローゼット。そこには、クッキー缶に並べて入れてある〝へろへろトロフィー〟の姿があった。私のトレーナーが私のためだけに稚拙ながらも頑張って作ってくれた稚拙なトロフィー……私の大切な宝物だった。
「へえ～これが……噂は本当だったんだね」
恥ずかしさで死にそうになりながらも、私は無造作にトロフィーへと延びるテイオーの腕を見て反射的に体が動く。気が付けば、私は彼女の手を捻り上げていた。
「いたたたっ!?　なにするのさネイチャ！」
「えっ……いやっ……あー……こんなんでもアタシの……」

「うんうん、宝物だもんね。ごめんねネイチャ」
「うっ……うーっ！」
　最早、言葉にならない何かを私は唸るしかない。テイオーは、そんな私をけらけらと笑いながら見た後、まっすぐとこちらを見つめてくる。私はそんな彼女の視線から逃れたかったが、目を離す事が出来なかった。
「やっぱり、ネイチャに相談して正解だったよ。ボク達の間で一番トレーナーと仲が良いのはネイチャだもんね」
「ううっ……」
「だからこそ、聞きたいんだ。ボクがトレーナーと一緒にいる時、胸がどきどきして、お腹の中が熱くなるのは何が原因なのかな？」
「……」
　こいつはわざとやっているのかと疑いたくなるが、彼女のキラキラとした何かを灯した瞳はそれが冗談ではない事を伝えてくる。だからこそ、私も真正面から答える。そうしなければ、テイオーが引くとは思えなかったからだ。

「テイオー……アンタは多分……」
「うん」
「トレーナーに恋してるんじゃない？」

　言った。言ってやった。言った方としても恥ずかしすぎるセリフだ。そして、当のテイオーはと言うとキラキラとした眩しいまでの笑顔を浮かべていた。

「そっか、そうなんだ……ボク、トレーナーに恋してるんだ！」

　満面の笑みで輝くテイオーに私は思わずパチパチと小さな拍手を送ってしまった。一方で、私の脳内も重大な混乱状態へと移行していた。トレーナーとの恋愛。それはウマ娘としての王道でもある。もしかしたら私も……

「ねえねえ、ネイチャはウマ娘の間で伝わる怪談話〝行方不明のウマ娘〟って知ってる？」
「おおう、急に何さテイオー。なんで話が恋バナから怪談話に転換するわけ……というかそれって……」

『行方不明のウマ娘』

それはウマ娘達の間で伝わる怪談話の一つであり、一種のタブーとされる話であった。内容は単純な物だ。毎年何千人とトレセン学園へと集まるウマ娘だが、夢破れて消息を絶ってしまうもの多くいるという。急に行方を眩ますウマ娘の話は私達にとって〝ありふれた話〟であった。

「ボクね、そんな行方不明のウマ娘達の想いに気付いちゃったんだ！」
「いやいや、急に怖いんですけど……どういうこと？」
「ウマ娘なら知ってるでしょ？　行方不明のウマ娘って担当してたトレーナーも一緒に行方不明になる事も多いって」

テイオーの言葉に私は口を閉ざす。夢破れたウマ娘の傍には同じく、夢破れたトレーナーがいる。彼らが揃って表舞台から姿を消すのはよくある話だ。そういう意味では、私もトレーナーも成功者であった。
「ボクも、〝行方不明のウマ娘〟にならないためにも、頑張らなくちゃ！　無敵のテイオー様は最強なんだ！　それじゃあボク、トレーナーの所に行ってくるね！」
そう言って、走り去ろうとするテイオーの腕を私は掴んでいた。何故かと言われたら、気になるからとしか言えない。話を投げっぱなし

にされるのは嫌であった。
「なにさネイチャ」
「いやいや、変な所で切り上げないで教えてくれてもいいじゃん。結局、行方不明のウマ娘の想いってなんなの？」
「ええーわからないのー？　ネイチャってばニブイなー！　話の流れが分かってたら理解出来るはずなのにー！　まーしょうがない……ボクが真実を教えてあげる。えっとね、〝行方不明のウマ娘〟はね……きっと……」

そう言って、満面の笑みをを浮かべるテイオーの表情は笑っていなかった。
その矛盾する彼女の表情に私は何故か背筋がゾクリと冷たくなった。

「トレーナーを自分以外の誰にも渡したくなかったんだよね」

そう言い放ったテイオーは気分よさげにはちみーの歌を口ずさみながら部屋を出て行った。私はしばらく放心する事しか出来なかった。そんな時、ベッド上に置かれたスマホが小さく振動する。画面にはメッセージアプリの通知が表示されていた。

「いつでも来い……か……」

私は予定通り浴室へと向かう。きちんと入浴して身体を綺麗にしてからトレーナーさんに会いに行こう。

「はちみーはちみーはっちみー」

気が付けば、私はテイオーがたまに歌っている歌を口ずさんでいた。

トレーナーさんのおうち

「落ち着け私あたし、別に変な意味はない。ただ単に遊びに来ただけだから」
　頬を両手で張りながら、自然と浮つく心と体を落ち着かせる。以前なら、友人の家に行く時と同じように気軽に来られた。しかし、さっき会ったテイオーと雑誌のせいで少し意識してしまっているのは自分でも理解出来た。
　私の視線の先にはトレーナー達が宿舎として利用している賃貸マンションがある。私がデビュー戦を勝利した時のお祝いも彼の家で行い、その後も何かと訪れる事が多かったため思い出深い場所である。併設された駐輪場に彼のバイクがある事を確認し、在宅である事を把握する。そして少し高なる胸を抑えながら私は彼の家の呼び鈴をならした。
「うーい……ってネイチャか。まあ入れ入れ」
「ごめんねトレーナー、休日まで付き合わせちゃってさ」
「何を言っているんだ。俺は愛するネイチャと会えるなら休日なんていらねえよ」
「また、そんなこと言って……はいはいありがと」
　トレーナーの軽口はいつもの事なので聞き流すが、ほんのりと赤面するのは仕方のない事であった。こうして私を招き入れた彼だが、私には目もくれずさっさと部屋へ引っ込んでテレビに釘付けになっていた。テレビにはボートレース……競艇が映し出されていた。
「トレーナー、またギャンブル？　お金ないんじゃなかったの？」
「安心しろネイチャ。俺はトレーナーだぞ？　人を見る目はそこでやしなってる。見た所この三人の選手は堅い。だから、この三連単は当たるんだ」
「あ、そう……」

「まあ任せろ。当てたら出前で寿司でも頼んでやる。もちろん奢りだ！」

そう言って自身満々に根拠不明な事を言いながら彼はテレビ画面に食いついていた。しかし、数分後は情けなくも部屋の床に無言で倒れ伏していた。どうやら勝負に負けたようだ。

「外れたの？　２度ある事はサンドピアリスって言うし、もうギャンブルなんかやめたら？」

「なんだか分からないなけど、それをウマ娘に言われるのは納得行かねー」

「いやいや　ウマ娘はギャンブルと無縁の存在だからね？」

「だからそれがアイデンティティの崩壊というか……とにかく寿司はなしな」

そう言って不貞腐れてベッドで毛布にくるまりはじめたトレーナーを見て私はかなり幻滅した。何というか、やっぱり彼は男としてダメだ。雑誌の件で浮ついた心が急速に冷めて行くのを感じた

「トレーナー、お昼ご飯は食べたの？」

「俺の今日の飯代は海の藻屑と消えたよ」

「はあ、まったく……トレーナーさんってば……まあいいか、肉じゃがとカレーどっちが食べたい？」

「そりゃカレー……ってもしかしてネイチャ……！」

「まっ、日頃のお礼をかねてちょっとね。材料も買ってあるからさ。トレーナーの冷蔵庫、いっつもすっからかんだし」

そう言って私は持参したエコバッグから材料を取り出す。彼はというと、いつのまにかベッドから私の前に場所を移して私の手をギュッと取ってきた。

「結婚してくれネイチャ」

いきなりそんな事を言う彼の腕を払い、私は思わず鼻で笑ってしまった。

「いやーレーナーさん、あたしにも選ぶ権利がってものがあるからね。まあ、今は料理の邪魔だから向こう行ってくれないかな」
「俺の一世一代の告白が……」
「その告白、トレーナーさんと契約してからもう１０回以上聞いてるんだけど」
　私の言葉に彼はショックを受けたようにずこずこと引き下がり、私はと言えば思わず苦笑してしまった。最初こそ彼の甘い言葉に動揺したが、いい加減慣れてはきた。ただ、慣れていても恥ずかしいものは恥ずかしい。少しだけ弾む心を抑えながら、私は気分よく食材を切り出した。

　それから、約一時間後。完成したカレーを彼は勢いよく頬張っていた。私より年上のはずなのに、なんだか幼さを感じるその姿は、何だか女としての本能をくすぐられる気分であった。
「うめ……うめ……ネイチャは何と言うか家庭的だな。是非俺のお嫁さんにください……」
「はいはい、ありがと。後、トレーナーさん。いい加減しつこい」
「すんまへん……」
「ふふっ、残ったルーは冷蔵庫に入れておくから。まあ、気が向いたら食べてー」
「おおう、せんきゅーネイチャ。あとおかわり！」
「自分でよそってきなさい」
「ういっす」
　キッチンに引っ込み、新たにカレーをよそってきた彼は続けてガツガツと食べ始めた。私も少し心が揺らいだが、食事制限中なので一杯でやめておいた。こうして、手持ち無沙汰になった私は自然と食事中の彼を眺めることに時間を費やした。
　トレーナーさんは特段整った容姿はしていない。私が指摘しなければ髭は放置するし髪型もバイクのヘルメットを取った後に整えず

にボサボサの事が多い。おまけに三枚目なキャラも合わさって彼に一目惚れするようなことはなかった。給料を賭博や煙草代で溶かしてる姿は呆れる他ない。

だが、彼と一緒に過ごすのは不思議と苦にはならない。トレーナーとしては割と多い熱血系を私が苦手としているからと言う理由もあるかも知れないが、それだけじゃない気がした。

「どうしたネイチャ？　俺の顔に何かついてるか？」

「別に……ただトレーナーって呑気な人だなって」

「失敬な！　これでも一応、色々とやってるんだからな！　色々と！」

不明瞭な回答をしながらカレーをかきこんで行く彼を私はしばらくぼーっと眺め続けた。そして、彼が完食したタイミングで、私は自分の中で未消化だった疑問を投げつける事にした。まずは、あの雑誌の件についてだ。

「トレーナー、〝例の雑誌〟は見た？」

「例の……ああ、あのゴシップ記事か」

「ゴシップ……」

「俺とネイチャが恋仲だとか書いてあったからな。俺はフラレっぱなしだってのによ。まあ気にするなネイチャ。名が売れたウマ娘はこの手のネタはどうしても出てくるもんだ。俺が相手ってのは心外かもしれないが勘弁してくれ。ゴシップを書く上でトレーナーとウマ娘って本当にありふれたネタだからな」

まるで他人事のようにそんな事を言う彼に私は何故かむっとしてしまった。それを表情に出してしまったからだろうか。彼は私に苦笑を返していた。

「大丈夫だネイチャ。君が男にとって魅力的なウマ娘だってのはファン1号として保証する。俺とのゴシップネタは少し傷にはなるが、それも理解した良い男はすぐに見つかるさ。まあ、出来れば男漁りは引退後にしてもらうのがトレーナーとしてありがたいけどな！」

「……」

「ネイチャ……？」

なんだか、彼に対してイライラが止まらなかった。さっきは私に随分と甘い言葉を吐いていたくせに、記事に対しては動揺もなくどこか他人事だ。何より、私が他の男の人と一緒になる事を祝福する彼の姿がとにかく納得行かなかった。
「トレーナー、あたしはあの記事ゴシップだって思ってないから」
「えっ……それは……」
驚きの表情を浮かべる彼に、私はこの胸の内の想いを吐き出せたらどれだけ楽になるだろうか。でも、私は自分の中の想いに明確な答えは出せていない。今の気分も、記事とテイオーの相談のせいで随分と浮ついている感触があったからだ。結果として、私は日和ってしまった。
「トレーナーさんと恋仲ってのは認めないけど、あたしがあのトロフィーを大切にしてるのは本当だから」
「そっちかあ……ってマジで!? あれ、律義に保管してたの? てっきり帰ったらゴミ箱に直行してるとばかり……」
「トレーナーさんの中のあたしのイメージってなんなの……あんなの、あたしが捨てられるわけないじゃん!」
言ってしまってから、私は知られたくなかった秘密をほいほい喋ってしまった事に気がついた。彼はというと、暑苦しくも涙ぐんでいた。
「そうか……本当に保管してるんだな……可愛い……ネイチャ可愛い!」
「う、うるさいトレーナーさん! あーあたしは何を言って……!」
「可愛い可愛いかわっうべっ!?」
思わず彼の顔をにアイアンクローをしてしまった。私も、ステイゴールドの凶暴性に影響されてしまったのだろうか。私の手から解放された彼はしばらくむせっていたが、今回は謝らない事にする。悪いのはトレーナーさんだ。
「しかし、ネイチャにもゴシップネタが出るって事はそれくらい有名になったって事か。なんだか感慨深いな」
「あんまり、この話はぶり返さないで! それって時と場合によって

はセクハラになるからね？」
「おう、わりぃわりぃ」
　ウマ娘が恋愛に現を抜かしているのはファンからは賛否両論とされる。別にアイドルみたいに現役ウマ娘が恋愛禁止なんて事はなく、歓迎されて応援される事も多いが、一部ではレースに集中できていないと証だと嫌うファンもいるそうだ。
「しかし、ある意味でタイムリーな話だな。実はあのテイオーが……ってこの話はやめとこうか」
「ちょい待ちトレーナーさんや、テイオーが何だっていうの？」
「いや、それは……」
「トレーナーさん、あたしはテイオーの同期で結構そういう相談も受けてるんだよね。そのためにも、出来るだけ情報は持っておきたいじゃん？」
　私の言葉に、彼はいくらか渋った様子を見せた。正直言って、私の言葉はいくらか出任せが混じっている。本音としてはあのテイオーの恋バナについてデバガメしたいだけであった。そして、彼はというとキョロキョロと窓の外を覗き、カーテンを閉める。そうして、重い口をやっと開いてくれた。
「この手の恋愛云々はレースに集中できてない証拠として敬遠されるのは、トレーナーの間でも同じなんだ。でも、適度に制御できればウマ娘の力を引き出せるってのもある種の常識でな」
「恋愛の制御……？」
「少し生々しい話になるが、今までの〝怪物〟として名を残してきたウマ娘の中にはそんなトレーナー達に力を引き出された奴もいるらしい。でも、ウマ娘の恋愛の制御に失敗したら別の意味で〝怪物〟になっちまうってのはよく聞く噂だ。ウマ娘ってのはレースとトレーニングで心を磨り減らす純粋で初心な女の子が多い。それを歪ませないようにトレーナーも工夫してるんだが……」
　そう言って、トレーナーはチラリとカーテンの閉じられた窓際を見る。それから、今まで以上に囁くような声で話し始めた。
「テイオーは体調面を含めて菊花賞に出るのは難しいはずだった。で

も、トレーナーがそんな彼女を言葉巧みに鼓舞して、なおかつ怪我を考慮したトレーニングで見事にクラシック三冠を取らせて見せた。だけどその反動でテイオーは彼に依存しきった……崇拝や心酔状態らしい。実は件のテイオーのトレーナーは俺の隣の部屋に住んでてな、宿舎の先輩トレーナーにはテイオーのトレーナー含めてお世話になってるんだが……」

そんな話の途中で、ピンポーンという呼び鈴がなった。それと同時にバンバンと扉を叩く音が聞こえてきた。トレーナーはというと、げんなりした様子で肩をすくめた。

「ここの所、休日になると毎回これだ。すまんがネイチャ、相手してくれ」

「えっ……相手って……」

私に面倒事を丸投げした彼は逃げるようにベッドへと向かった。仕方なく私が玄関へ向かい扉を開けると、さっきぶりとなるテイオーの姿があった。

「あっ、ネイチャ。君も自分のトレーナーに会いに来てたんだ。ふふーん、ネイチャもすみにおけませんなー」

「あーはいはい、ありがと。それで何の用なの？」

「えっとね、ボクのトレーナーってば家に会いに行っても大抵留守にしてるんだよね。そういう時は、他のトレーナーさんの家に遊びに行ってる事が多いんだ。だから……すんすん」

急に鼻をすんすんしはじめたテイオーに私が無言で引いていると、彼女は不貞腐れたように口を曲げていた。

「ざんねん！　ボクのトレーナーはここにはいないみたいだね」

「あっはい」

「それじゃあ、ネイチャ！　また今度！　ボクはボクだけのトレーナーさんを探さなきゃいけないから」

そう言って嵐のように玄関から出て行ったテイオーに私は気圧されながら、玄関のカギを閉めようと手を伸ばす。そんな時、玄関の扉

がわずかにだが開いた。

「ネイチャも気をつけた方が良いよ。トレーナーの部屋からボク以外のウマ娘の匂いがするなんて、ボクに対しての裏切り行為だよね」

ガチャんと閉まった玄関扉の前で、私はしばらく立ち尽くしていた。

その後、お互いに色々と察した私とトレーナーは自然とテイオーの話題は口にしなかった。その後は、テレビを見ながら雑談したり、部屋の掃除を手伝った後、彼の持つ蔵書漁りに没頭した。流石はトレーナーというだけあって、彼の持つレースに関する本や歴代の有名ウマ娘に関する逸話やトレーニング法は読んでいて勉強になる。そういえば、彼の家にこうして来るきっかけになったのも、これらの蔵書であった。

「あっやばっ！」

気づけば、時刻はいつの間にか夕刻へと差し掛かっていた。門限にはまだ遠いが、そろそろお暇すべきだろう。本から顔を上げると、パソコンデスク前の座椅子に背を預けてぐーすかと眠る彼の姿が見えた。その姿を微笑ましく思いながらも、私は彼にこっそり近づいた。そして、彼へと顔を近づけ……そっと匂いを嗅いだ。ほんのりと香る汗の匂いと、不快な煙草の匂いはいつも通りの彼の匂いであった。

「なにやってんだろあたし……」

妙な事故嫌悪に陥りながら、私は彼を揺り起こそうとする。そんな時、彼が使っているパソコンの近くに紙で作られたトロフィーが鎮座していた。それを見ないようにしながら、私は彼の身体を揺すった。

「んあっ……ネイチャ……？」
「トレーナーさん、あたしそろそろ帰るね」
「ああっ……待て待て！　送ってやるから少し待ってな！」

そう言って、ジャケットを着始めたトレーナーを私は優しく見守った。

夕日が落ちていく中、私は彼が操る鉄の愛バの後ろへと座る。インカム越しに彼の陽気な鼻歌を私は静かに楽しんだ。そして、彼の背に私はギュっとしがみつく。ヘルメット越しに香る彼のジャケットは排気ガスと彼の体臭混じったいつもの匂いであった。

「それじゃあトレーナーさん。今日はありがと」
「こっちこそ、飯を作ってくれてありがとよ。まあ、暇なときはいつでも来い。俺はいつでも歓迎だからさ」
「はいはい、そのお言葉には少し甘えさせてもらうかもね」

ウマ娘寮の前で私とトレーナーは笑いあう。そして、バイクに跨ってヘルメットをかぶろうとした彼を私は気づけば引き留めていた。
「ねえ、トレーナーさん。また新しいトロフィー作ったの？」
「ああ、見ちまったか！　まあバレたもんはしょうがない。あれはお前のためのトロフィー……次に挑む〝毎日王冠〟のためのものだ」

毎日王冠……秋の天皇賞の前哨戦ともなるＧ２の重賞だ。私の休養明けのレースの事をトレーナーはもう考えていてくれたようだ。自然と熱くなる身体は、私にレースに勝ちたいという闘志を自然と湧きあがらせてくれた。
「ねえ、トレーナーさん」
「どうした？」

気づけば、私の意志に反して口が動いてしまった。

「それとは別の……あの作りかけのトロフィーはなに？」

それは、私のために作られたと思われるトロフィーの横にあった。まだ完成品に至っていない作りかけのものが私は妙に気になった。

「あれは……ステイゴールドのためのものだ。あいつも、上手くいけば菊花賞には出られるかも知れないんだ。まあ、その時の保険だな」

「トレーナーさんってば、トロフィーを作るのがクセになってるの？」

「まあ、そんな感じだ。俺は俺で色々心をこめてるんだぜ？　いやはや、トレーナー業ってのは諸行無常だねえ……」

「ふふっ、意味わかんない」

「わりい、かっこつけたわ。まっ、そんじゃ明日もよろしくな」

ヘルメットをかぶり、大きく手を振ってから彼は鉄の愛馬を走らせる。私は、そんな彼の背が見えなくなるまで手を振り続けた。

その日の夜、私は机の上に彼から貰ったへろへろのトロフィーを並べた。小倉記念、京都新聞杯、菊花賞、鳴尾記念、有マ記念。その一つ一つに私の大切な思い出が詰まっていた。そして、それはこれからも増える。私と彼が共に歩んだ証拠として残るはずだった。

「そっか……あたし以外にも渡すんだ……」

私はその不格好なトロフィーをそっと撫で続けた。

「えっ、北海道にレースしに行く……しかもバイクでですか……？」
「そうだ。いくら説得してもまったく聞く耳を持たねえ……本当にイラつく……その生意気な尻をペシペシ叩きたい気分だ！」
「おいおいおい、オレの目の前で随分な言い草じゃねーか。せっかくだからオレがクソ雑魚トレーナーのケツを蹴り上げるてやろうか？」
　トレーナー室に入った私を出迎えたのは、事務机で困ったように頬杖をつく彼とソファーで足を組みながらビーフジャーキーをガジガジ噛んでいるステイゴールドであった。そして、彼の話を聞いた私はやはり困り顔になってしまった。
「ねえステゴ、流石にまずいんじゃない？　怪我とかも怖いしさ、勝負に勝ちたいなら飛行機で行けばいいじゃん」
「悪いな姉貴、オレは北海道に足を踏み入れる時は愛車で行くと決めてんだ。オレのやる気も〝絶好調〟になるし、レースに勝って賞金も頂く。この遠征はオレにとってメリットしかないんだよ」
「ネイチャ、諦めろ。コイツは人の言う事をてんで聞かねえ。どうしようもない暴れウマだ」
　溜息をつくトレーナーは少し疲れた顔で椅子から立ち上がる。そして私の頭の上にぽんぽんと手を当てて撫でる。そんな彼の手を私は少し無理やりはがすと、トレーナーは苦笑を浮かべた。
「悪いなネイチャ、お前も調子が戻って来た所なのにな。とりあえず理事長に伺い立てて、問題ないようならアイツに付き合うよ。流石に傍についてないと色々とマズイからな」
「うーん、まあトレーナーがそう決めたならあたしは文句は言わないけど……」
「ああ、ネイチャは扱いやすくていいな」

「ちょいちょいトレーナーさん、さりげなくあたしにヒドイ事言ってない？」
「そんな事はないぞ！　ネイチャは素直で可愛いって事だ」
「うにゃっ!?　だからそういうのやめてっていったじゃん！」
　トレーナーの軽口に私は思わず赤面してしまう。そんな私を彼はもうひと撫でしてから部屋を出て行った。若干乱れた髪を整えつつ、私は自分自身が嫌になった。なんだかトレーナーにいいように扱われるのは少しだけ不満だった。
「わりいな、姉貴も毎日王冠に出走するってるのは知ってるんだが、少しアイツを借りるわ」
「いや、別にそこは構わないけどさ。ステゴだけじゃなくて、トレーナーさんに対してもなんだけど、やっぱり心配なんだよね。ほら、バイクって事故とか多いじゃん」
「おっと、この話はやめようか姉貴。その話題はされたバイク乗りは惨めにムキになるしかないからな」
　肩をすくめて押し黙ってしまったステイゴールドを私はじっと見つめる。彼女がチームに入って早くも４か月が経過していた。その間に彼女はすいれん賞を勝利、続くやまゆりステークスでも４着と掲示板内を確保している。また、彼女は夏季には不思議なほど真面目にトレーニングに励んでいた為、トレーナーは私と同じような重賞ウマ娘になれるのではと期待しているようだ。
　彼女の性格はいまだに掴めてはいないが、四か月もあればステイゴールドというウマ娘の情報は自然と耳に入って来る。
　トレセン学園の問題児の一人であり、素行不良や授業のサボリ癖はよく噂になっている。だが、学力は同世代でもトップクラスであり、リーダー気質でカリスマもあるためウマ娘の間でも妙な人気を獲得しているらしい。
　私も彼女と数か月接して理解出来のだが、彼女は決して〝バカ〟ではない。何も考えてなさそうな行動の裏で、彼女なりの理論に基づいて行動している事が多いと私は理解していた。今回の北海道への遠征も、彼女なりの考えがあるのだろう。

「おっ……海鮮丼か……肉もいいけど海の幸も捨てられねえよな……」

ニヘラっとした顔で旅行雑誌を読むステイゴールドを見て、やっぱり何も考えていないのではと思い始めた。そうして、呆れた顔を浮かべてしまった私を彼女はチラリと見て、旅行雑誌で顔を埋める。それから、私に対して小さく頭を下げてきた。

「姉貴許してくれ。オレは今後はレースに〝マジ〟になる。だから、今回の遠征はレースがてらの遊び納めだ。本当は一人で行ってもいいんだが、流石にこの距離のツーリングは初めてなんだ。トレーナーはクソ雑魚だけど、ライダーとしてはオレより経験あるし、まあ荷物持ちくらいには使えるからよ……うん……だから……」

雑誌で隠れて彼女の表情は見えないが、私はもう一度大きくため息をついた。ステイゴールドはトレーナーを蹴飛ばすし、噛みつくし、指示に従わない事もある。それでも、毎日このトレーナー室に姿を現すのを見るに、彼女は彼女でトレーナーにある程度の信頼を置いているようであった。こういう事情を理解すると、生意気さの中に一定の可愛さを見出してしまうのは仕方のない事であった。

「なんだかよく分からないけど、レースには勝ちなさいよ。本当に遊びに行っただけって思われるのはイヤじゃん？」

「おう、クソ雑魚トレーナー……姉貴の旦那の評価にも関わるしな。まあ世界最強のオレ様に任せな」

「だ、旦那じゃないから！　まったく……」

なんだかステイゴールドからも良いように扱われている気がするが、沸騰気味な私の頭はそんな事を考える余裕はなかった。

それから三日後、私達はトレーナーの家の前に集まっていた。ステ

イゴールドは軒先に止められた赤いネイキッドバイクに跨り、意味もなくふかして気分よさげな笑顔を浮かべていた。そして、トレーナーはというと……ニコニコとした表情で自分の大型バイクに荷物を括りつけていた。
「トレーナー、表情が緩んでる」
「おっと、何を言うんだネイチャ。俺は決して遊びに行くわけじゃないぞ。理事長も今回の遠征は『了承ッ！』って許可をくれたし、北海道で行われる〝阿寒湖特別〟は確かにアイツの能力をはかるのには丁度いいんだ」
「ふーん……」
「まあ、あれだ。お土産に木彫りの熊買ってきてやるからさ」
「いやいや、そういうお土産は貰っても困るからね……」
　私の呆れが入ったツッコミはトレーナーのバイクによるエンジン音にかき消された。彼の様子は競艇で買った時と同様の物だ。つまりはやっぱり浮かれているらしい。私の中のトレーナーに対する好感度がまた一つ落ちる音がした。
「ネイチャ、トレーニングメニューはトレーナー室の俺の机に入ってる。まあ復帰戦の毎日王冠までは変わらず無理はするな。後、これは俺の部屋の合鍵だ。気になる本があるなら勝手に持って行っていいし、パソコンも勝手に使って構わない。一応、ちょくちょくは電話はいれるし、念のために先輩トレーナーにお前を気にかけて貰えるようにお願いしたから……」
「クソ雑魚トレーナー！　はやく行くぞ！　大洗に向けて出発、しゅっぱーつ！」
「おいコラ安全運転で……悪いネイチャ！　また後で電話する！」
　爆音を立てながら走り出してしまったステイゴールドを追いかけて、彼は私の視界から消える。振っていた手を下げ、彼に手渡されたカギを懐へと入れた。しばらく無心で佇んでいた私はゆっくりと帰路につく事にした。
　トレーナー室へと帰還した私は彼の机の引き出しをそっと開く。そこには彼の言っていた通り、私のためのトレーニングメニューが記

された冊子があった。ページをパラパラとめくると最後に『無理はするなよ』と彼の手書きの文字があった。それを見て思わずくすりと微笑んでしまった後、私はグラウンドへと足を進めた。

「まあ、頑張りますかー」

そう呟いて気合を入れる。ステイゴールドの事は別に考えなくてもいい。いま私が考えるべきことは復帰戦となる毎日王冠に向けてコンディションを整える事だけであった。

「頑張ろう……」

そして、トレセン学園が夕日に染まる時間帯。私は汗に濡れて火照る身体を休めつつ、トレーナー室へとゆっくりと帰り着く。手と顔を洗い、真っ先に向かったのは冷蔵庫だ。そこから冷やされた水を取り出して一気に飲み干す。ほうっと漏れ出る息には疲れだけでなくウマ娘としての充足感も混じっていた。そうして、横目で部屋内をチラリと見る。そこに、トレーナーの姿はない。いつも練習終わりに絡んでくる彼の事は少しうざかった。だけど、今はそんな彼が少し恋しかった。

「そっか……あたし初めて一人で……ああもうバカ、あたしのバカ！」

いなくなって初めて分かる感情というものがある。そんな事を実感させてくれるくらい、私は彼を信頼していた……いや〝依存〟していた。彼が私のトレーナーになってから約一年半、彼が私の隣にいる事が半ば当然の事となっていた。その〝当たり前〟が初めて崩れた瞬間だった。

「トレーナーさんのバカ……」

笑顔でバイクを発進させる彼の姿が頭に焼き付いて離れない。そして、そんな彼の笑顔がなんだか気に入らなかった。

翌日、私は無言でトレーナー室へと足を運ぶ。トレーニングメニューは手元にあるため、ここにくる必要はない。だが、私の足は無意識にそこへと足を運ばせていた。それだけ、私にとってトレーナー室は慣れ親しんだ場所であった。そして、部屋に入った私は一瞬ぎょっとする。彼の椅子に何者かが腰かけていたからだ。

「トレーナー!? じゃあないよね……うん……ってアンタは……」

「やっほーネイチャ! んふふーボクのこと誰と間違えちゃったのかなー?」

そこには我が物顔で腰かける、トウカイテイオーの姿があった。

「でも間違いじゃないよ。ボク、二週間だけだけど、ネイチャのトレーナーになってってお願いされてるんだよね! 今後ともよろしくーぶいぶいー!」

笑顔でダブルピースを決めるテイオーに、私は乾いた笑いを返した。

阿寒湖特別

「えーもっと喜んでもいーじゃん！　ボクにトレーニングを見て貰えるなんてとっても光栄な事だって思わないのー？」
「いや、そりゃあ無敗の三冠ウマ娘さんにトレーニングを見て貰えるのは滅多にない機会だけど……なんで急にそんな事を……」
「もう、ネイチャのトレーナーから聞かなかったの？　君のトレーナーがボクのトレーナーに面倒見て欲しいってお願いしたみたいなんだー！」
　彼が普段使用しているオフィスチェアに座り、くるくると回転しているのは私の世代の主人公、トウカイテイオーだ。彼女はいつもの無邪気な笑顔を浮かべていた。そういえばトレーナーが先輩に見守りをお願いしたうんぬんというものを去り際に言っていたのを思い出した。
「それにさ、ネイチャって可愛いからさー」
「急になにを……！」
「ボクのトレーナーに近づいて欲しくないんだよね」
「ひぅっ!?」
　笑顔でそんな事を言うテイオーに私は小さな悲鳴を上げる。それに、背筋に嫌なものを感じた。テイオーの表情は笑顔だが、目が笑っていなかったのだ。
「いやいやテイオーさん、女房妬くほど亭主もてはせずって言うじゃん。そんなに気にしなくてもいいと思うな」
「ボクはまだ女房になってすらいないんだ。可能性が少しでもあるならボクは徹底的に潰すよ」
「あっ、はい」
　テイオーの答えに気圧されて私はコクコクと頷く。羨望と少しの嫉妬心を抱いていたキラキラに輝く主人公、トウカイテイオーは今で

はキラキラどころか、ドロドロに薄汚れていた。それでも、彼女の意志の強さだけは良い意味でも悪い意味でも変わらない。むしろ、私にとっては彼女の存在はより遠いものとなってしまった。
「でも、ネイチャを蔑ろにするのはボクもトレーナーも望んでないんだ。だからこそ、このボクが指導してあげる！　ふふん、無敵のテイオー様はトレーナーになっても最強なのだ！」
「ええっ……」
　笑顔の彼女には悪いが私は思わず手でこめかみを押さえてしまった。天才的なウマ娘が天才的なトレーナーになるとは限らない。ウマ娘だけでもなく、スポーツ関係でも起こりうる問題だ。それに、明らかな〝天才肌〟タイプである彼女に指導力があるとは思えなかった。テイオーはそんな私の不安を見透かしたように、ニヤリとした笑顔を浮かべた。
「まあまあ、ついてきてネイチャ」
「ちょ、ちょっと！」
　駆け出したテイオーを私は半ば無意識に追いかける。そうしてたどり着いたのはいつものグラウンドだ。テイオーは私をチラリと見た後、スターティングポーズを取っていた。
「流石のボクも、トレーニングに関しては上から物を言う立場じゃないって理解してる。それなら、併せウマをするしかないよね。ほらっ、ひたすら実践あるのみって言うでしょ？」
「ちょっとちょっと！　流石にアンタとの併走なんて結果が見えてるし……」
「どーん！」
「ま、まて！」
　早くも走り出したテイオーに私は追いすがる。これもウマ娘としての本能なのか、気づけば本気で勝ちに行こうと彼女の輝く背中を追った。
「ふい～しょうり～！　ネイチャも凄いじゃん！　ボクを二バ身差ま

で追い詰めるなんてさ！」
「はぁ……はぁ……嫌味……いやこの子ってば素で言ってるわね……」
「よし、それじゃあ2本目ごー！」
「なっ！」
　もう一度走り出したテイオーを再び追う。例え勝てないとしても、これ以上は彼女に距離を離されたくなかった。

「はーい、今日はよく頑張ったねネイチャ！　でも、ボクに一度も先着できなかったのは残念だったねえ……後半はボクも疲れて手を抜いてたんだけど……」
「っ……」
「今日はボクの勝ち！　何で負けたか、明日まで考えといてネ。そしたら何かが見えてくるはずだからさ。それじゃあまた明日、ばいばいネイチャー！」
　いつの間にか日の沈む時間帯になっていた。笑顔で走り去るテイオーを荒れた息を整えながら見送る。そうして日が沈むまで身体を休めた後、私は意味もなく周囲の芝を手でむしりながら項垂れた。

「何で負けたかって……そもそもあたしごときがあの主人公に勝てるわけないじゃん……仕方ない……仕方ないよね」

　誰かに言い訳するようにそう呟いた後、私はトレーナー室へ向けてとぼとぼと歩き出した。

「はい、ボクの勝ち！　たかが併せウマって思ってない？　それだったら、ボクには一生勝てないよ？」
「はあ……はあ……！」
「それじゃあまた明日！　バイビー！」

その翌日、私はまたしてもテイオーに先着出来なかった。次の日も、また次の日も私はテイオーに勝てなかった。むしろ、彼女と私の着差は徐々に広がっていた。

……

「もう、本気でやってるのネイチャ？」
「あたしは……そりゃあ勝てないなりに作戦を組んで……」
「ふーん」
「っ……」

早くもテイオーがトレーナーもどきの業務について一週間が経過した。その間、行ったのは彼女との併せウマのみ。もちろん、私は彼女に一度も先着できなかった。

「まっ、臨時とはいえボクはネイチャのトレーナーだからね。出来る限りの事はしようかな。んふーそれじゃあ質問！　ネイチャはなんでレースに出て走ってるの？」
「なんでって……そりゃあアンタみたいなキラキラなウマ娘に近づくため……いや、レースに勝って見てくれてる皆に夢を与えられるキラキラなウマ娘になりたいから……だからあたしは走り続けてる」

正直言って、テイオーには一生勝てる気がしない。でも、私は彼女のような〝主人公〟に追いつくため、こんな私を応援し続けるトレーナーやファンの人達のためにも、この足を止めるわけにはいかなかった。テイオーはというと、私の宣言を聞いて何やらうんうんと頷いていた。

「おーなるほどなるほどー！　すごい立派な夢もある。そのための努力は怠ってないし、GⅠはまだとは言え、ネイチャもGⅡやGⅢを勝ち上がった重賞ウマ娘……今更トレーニングがどうとか、併せウマをしたくらいじゃ身に入んないよねー」
「別にそういうわけじゃ……」

「うんうん任せて！　ボクがネイチャを一皮剥けさせてあげるよ！
まあ、その方法はまた明日って事で！　少し早いけど、ボクはこのあとトレーナーにいっぱい撫でてもらう約束をしてるんだ！　それじゃあまた明日！」
「ちょっ……」
　毎日嵐のように過ぎ去って行くテイオーとのトレーニングにいくらかの疲労と、いくらかの充実を覚えるようになった。なんだかんだで、彼女にはこれ以上負けたくはない。そう考えて、私は一人でグラウンドでのランニングに励む事にした。そんな時、ベンチに置いていた鞄から着信音が鳴り響く。慌てて駆け戻った私はスマホの画面を見て思わず頬が緩む。それはトレーナーからの着信であった。
『もしもし、ネイチャか？』
「うんうん、あたし。急にどうしたのトレーナーさん」
『いや、普通に心配だから電話してるんだ。先輩トレーナーから、お前にテイオーをあてがったって電話で聞いてな。なんつーか、ネイチャってテイオーを色々と意識してるだろ？』
「あーはいはい。ご心配頂きどーもどーも。確かにテイオーの事はちょっと意識してるけど、別に問題ないから。それより、トレーナーはステゴの事に専念してよ。きっと、あの子も不安をいっぱい抱えてるはずだからさ」
『不安……？　アイツが……――わははっ見ろよクソ雑魚トレーナー！　霧の摩周湖どころか滅茶苦茶に晴れてるじゃねーか！　こりゃあ婚期が遠のくな……もしかして一生童貞かもな！――うるさいっ！　今はネイチャと電話中だ！』
「トレーナー？」
『悪いなネイチャ、ちょっとステイゴールドの気晴らしに付き合ってな。こっち来てからアイツのテンションおかしいんだよ』
　トレーナーの声に混じり、風の音やステイゴールドの声が漏れ聞こえる。どうやら、彼は外出先で電話をかけているようだった。
『とにかく、無理だけはするなよ。それと、何かあったらすぐに俺へ電話してくれ。最悪、ステイゴールドを捨ておいてでもそっちに行くか

らさ』
「ふふっ、ネイチャさんは大丈夫ですー！　トレーナーこそ何かあったら電話してよね。貴方の担当ウマ娘として相談くらいは乗れるからさ」
『ネイチャ……なんつーかもう、けっ――網走！　次は網走行こうぜクソ雑魚トレーナー！　刑務所とかお前にぴったりだしな！――こら引っ張るな！　今はネイチャと電話中で……いてぇ!?　何故噛む!?　分かった分かったから……うおっ……!?』
　ぶつりと切れた電話により、向こうの状況は手に取るように分かる。おそらく、またステイゴールドの理不尽に晒されているのだろう。ただ、それはそれとして久しぶりに彼の声を聞いた。それだけでちょっと元気が湧いて来た自分自身に少し呆れた。
「あたしも頑張らなくちゃ……」

　私はもう一度気合を入れなおし、グラウンドへと駆け出した。

　翌日、テイオーが私を引きずるようにして連れてきたのはいつものグラウンドではなく、トレーナーが住む宿舎の前であった。意味が分からず立ち尽くす私に彼女は右手をそっと差し出してきた。
「ネイチャってさ、合鍵渡されたんでしょう？　それ、貸してよ」
「いやいや、えっ、急になんなのさ？」
「もう、昨日言ったじゃんネイチャ！　ボクがネイチャをもっと強くしてあげるよ」
「それとこれとはどういう関係が……ひゃっ!?」
　困惑しているうちにテイオーが私の懐を無遠慮にもまさぐってきた。そのまま私の全身チェックを行い、トレーナーの部屋の鍵を引き当てた彼女はずんずんと部屋へ向けて足を進める。私はそんな彼女に二の句も告げず、付き従うしかなかった。
　そして、無言で鍵を開けて彼の部屋に入るテイオーに流石にカチン

とくる。気づけば、私はテイオー右腕を思いっきりに掴んでいた。
「ちょっと、本当になんなの？　トレーナーは厚意で鍵をあたしに預けてくれただけなの。本当に好き勝手に彼の部屋を使うのは悪いでしょ？」
「ネイチャってば、本当に良い子なんだから。でも、良いよその表情。ネイチャの本気の表情、久しぶりに見たな」
「意味わかんないし……」
「ごめんね、怒らせちゃった？　でも入るね！」
「っ……！」
　外靴を玄関に脱ぎ捨て、逃げるように部屋に入ったテイオーを私は追う。色々と失礼な彼女にはとさかにきていたが、早くも彼のベッドにダイブしていた彼女を見て私の中の何かがプチンと切れた。

「いい加減にして、テイオー」
「いにゃっ!?　なにすんだよー！」
「抵抗しないで」
　テイオーの細い首筋を掴んで無理やりベッドから引きずり下ろす。彼女はしばらく暴れていたが、観念したように膨らませた頬をこっちに向けた。
「ねえ、結局、アンタはなにがしたいわけ？」
「んふふーちょっとネイチャを試しただけだよ。でも、想像以上だったね。やっぱり、ネイチャもトレーナーの事が好きなんだね」
「はあ!?」
　笑顔でそんな事を言うテイオーに私は真顔で返してしまう。今のやりとりで、どうしてそんな判断に至ったのか理解出来なかった。
「そりゃあトレーナーは信頼してるけど、恋愛対象としてはちょっとね……」
「うんうん、ボクも色々と思い悩んでたけど、素直になっちゃった方が良いよ。せっかくネイチャのおかげでボクはもっともっと強くなれたのに、ネイチャがこの調子じゃね……まあいいや！　このテイオー様が秘密の特訓をしてあげるから！　感謝してよね！」

「ああっ……もういい疲れた……」

結局、私はテイオーに白旗あげた。ここまで話が噛み合わないと、歯向かう気すら起きなかった。そんな私の顔面に彼女は急に枕を押し付けてきた。くぐもった悲鳴は声に出ず、暗闇となった視界には何も映らない。ただ、嗅覚だけは正常に働いていた。この汗の匂いと微かな煙草の匂いは間違いなくトレーナーの匂いであった。

「ネイチャ、落ち着いた？」

「別に……結局アンタは何がしたいの……」

「だから何度も言ってるじゃんか。秘密の特訓だよ」

テイオーの返答に私は閉口する。そのまま気まずい沈黙がしばらく続いた後、彼女はくすりと笑ってから口を開いた。

「ねえねえ、ネイチャ。ボクはね、レースで勝つためにはやっぱりメンタルが一番大事だって思ってるんだ」

「……」

「大好きなカイチョーに褒めて貰いたいし、ボクの愛してるトレーナーに抱きしめてもらいたいからボクは頑張れる。でも、ボクだって色んな悩み事があるんだ。その悩みを放っておくとレースに集中できなくていい結果は出ない。だからネイチャにはこの悩みの解消法を教えてあげる」

そう言って、テイオーは私にまたしてもトレーナーが使っている枕を押し付けてくる。その匂いは正直言って気分の良いものではない。はっきり言って臭かった。それでも、気づけば私はすんすんと匂いを嗅ぎ続けていた。

「ネイチャ、表情が蕩けてるよ」

「んなっ!?　あたしは別に……！」

「いいのいいの！　ボクもストレスが溜まったらトレーナーの匂いを嗅いでるんだ。不思議だよね。良い匂いじゃないんだけど、とっても安心できるんだよね」

「うっ……！」

テイオーの得意げな表情を前に私は言葉を詰まらせる。彼女に流

されて私は一体何をやらされているのだろうか。そう思い立って正気を取り戻した時、身体が暖かさに包まれる。テイオーが私にトレーナーの使用している毛布をかけてきたのだ。瞬間、私の周囲の〝濃度〟が数倍となる。そういえば、メイクデビューを無事勝利出来た時、感極まったトレーナーが抱き着いて来た事があった。あの時はすぐに振り払ったのだが、実はそんなに満更でも……

「うにゃー！」

「ひっ、急に何さ!?」

「急にも何もアンタは何がしたいわけ!?　あたしにこんな……こんなはしたないこと……！」

「はしたなくないよ。好きな人の事を感じられるもの触れて気分が高揚するのは、人間やウマ娘にとって当然の事だよね？」

「別にあたしはトレーナーさんなんか……」

「そこだよネイチャ。君はもう少し自分の欲望に素直になった方が良いよ？　そうしないと、絶対に後悔する事になるからさ」

そう言って微笑むテイオーに私は不思議な威圧感を覚えた。同期ではあるが、内心自分より子供っぽいと思っていた彼女は、もう〝女の顔〟になっていた。それがどこか悔しく感じた。

「ボクのトレーナーはね、いっぱいボクに甘い言葉を囁いてくれるんだ。でも、それはボクだけが特別だからじゃない。チームメイトのマヤノ……マヤノトップガンにも同じような事を言ってる。それがトレーナーの指導方針だって事に気づいたのつい最近なんだ。ホント、悪いヒトだよね？」

「うっ……なんだかあたしのトレーナーに似てるかも……」

「そうなの？　だったら気をつけた方が良いよ。ボクにとってマヤノは今では恋のライバルでもあるんだけど、ネイチャにもそんな存在が現れるんじゃないかな。ほら、君のとこにもチームメイトが新しく加わったんでしょう？」

「いや、ステイゴールドはそんなんじゃないし……」

「そう思っているうちに出し抜かれるんだよ？　ボクがトレーナーの

部屋に行き始めた頃、そこはすでにマヤノの牙城だったしね。ホントに許せないよね」
　クスクス笑うテイオーの目はやっぱり笑っていなかった。それと、さりげなくとんでもない事を言っている彼女に私は引いた。
「ねえネイチャ、君のトレーナーの匂いは他のウマ娘に汚されてない？」
「汚されるって……ま、まあ今のところは彼以外の匂いはしないけど……」
「それだったら気を付けてね。他の子の匂いがし始めたら要注意だよ。ボクのトレーナーなんかさ、最近ボクやマヤノとも違う〝知らないウマ娘の匂い〟を身体につけてるんだ。許せない……許せないよね……」
「テイオー……」
　私は、まだ彼女のような経験はない。トレーナーは色々と遊んでそうだが、私の〝鼻につく〟ように匂いは漂わせていないからだ。だが、それもステイゴールドのチームへの加入で変わるかもしれない。彼女がトレーナーになびく姿は想像できないが、事実として、彼はもう〝私だけのトレーナー〟ではなくなってしまったのだ。
「むむっ！」
　そんな時、テイオーがウマ耳をぴーんと立たせる。同時に、私のウマ耳も隣室からの物音を捉える。どうやら、隣室の住人が帰還したらしい。それはすなわち、隣室に住んでいるというテイオーのトレーナーの帰還を意味していた。
「それじゃあネイチャ、今日の特訓はここまで！　おさらいだけど……ストレスは適度に発散する事。それと、自分の欲望には素直に従う事。愛する人に褒められたい、撫でられたい、ボクだけを見ていて欲しい……そんな〝欲望〟に素直になろう……ねえネイチャ？」
「いや、だからあたしは別に……」
「続きはまた今度！　ボク、用事が出来ちゃったから！」
　そう言って足早に部屋を出て行ったトウカイテイオーを私は無言で見送る。そして、しばらくしないうちに隣室からドタバタという物

音と、甲高いテイオーの声が微かに聞こえてきた。

「ああ、もう本当に意味わからない」

疲労を隠しきれず思わず独り言ちる。ベッドに倒れ込んだ私は無意識のうちに彼の枕を抱き寄せていた。その匂いはやっぱり臭かった。でも、嫌いな匂いではなかった。そういえば、実家のスナックも時折こんな匂いをしていた気がした。気分が落ち着くのはそこに秘密が隠されているのかもしれない。

「トレーナーさん……大丈夫かな……」

あのステイゴールドの引率を一人でやっているのだ。恐らく、疲労はたまっているだろう。頑張っている彼にはまた今度料理を振舞う事にしよう。自分で言うのもなんだが、不味くはないはずだ。そうして、喜んで笑顔を見せる彼の姿がまた見たかった。

「ふぁっ……ふふっ……トレーナーさん……」

気づけば、私は沸き起こる睡魔に寝負けして目を閉じてしまった。彼の枕に顔を押し付け、毛布を被る。そうすると何とも言えない安心感と全能感に包まれたのであった。

賢さが２０上がった。

『独占力』のヒントＬｖが５上がった。

トウカイテイオーの絆ゲージが５上がった。

「ひゃっ!?　なに!?」

何か変な夢を見た私は慌てて起き上がった。そして、なぜ自分がト

レーナーの部屋にいるのかと自問する事数分、私は置き時計を見て門限が近い事に気が付いた。さっと血の気が引いていく感覚を味わいながら、私は急いで駆け出していた。

「はあ、間に合った……」

数十分後、私は無事自室へと帰り着いていた。部屋ではベッドに転がりながらテレビを見ているマーベラスサンデーの姿がある。彼女はいつもの無邪気な笑顔を私に向けてきた。

「やっほーネイチャ！　今日は少し帰りが遅かったね。きっといっぱいトレーニングしてたんだよね。うんうん、マーベラス！」

「はいはい、ありがと……」

いつもの調子のマーベラスに苦笑を返しつつ、私はベッドへと腰かける。そして、テレビで放映しているお笑い番組に目を向けようとした時、マーベラスがこちらをじっと見ている事に気が付いた。

「ねーねーネイチャー！」

「どしたのー？」

「その手に持ってる枕はなにー？　新しく買ったの？」

「えっ……えっ……!?」

私は目線を下にずらす。そこには無意識のうちに膝の上に乗せていた彼の枕があった。よりにもよってこんな物を持って帰ってきてしまった自分が恥ずかしかったし、枕片手に街中を全力疾走していた自分の姿を省みて羞恥心が爆発してしまった。

「なんであたし……うにゃーっ！」

「あははっ！　なんだか分からないけどマーベラス☆！」

瞳を輝かせるマーベラスの横で、私はどうしようない深淵に落ちて行く感覚に陥った。

「あっ、ネイチャ！　ついに始まるよ！」
「分かってるから黙って」
「ちょっと、なんか最近ボクに冷たくない？　ボクとしてはもうちょっと感謝してくれてもいいと思うけどなー」

トレーナー室において、私とテイオーはテレビをつけてそれを食い入るように見つめていた。テレビには札幌メインレースの前走、阿寒湖特別の出走が開始間際となった。パドックインタビューでは相変わらず強気な発言をしていたステイゴールドはすでにゲートへとおさまってる。事前投票では三番人気。レースを見守る観客たちも十分に勝ちを狙えると判断しているのだろう。
「ステイゴールドはシニア級のウマ娘と戦うのは初めてみたいだね。勝てると思う？」
「正直言って分からないかな。でも、これで勝てなかったら菊花賞には絶対出走出来ない。全てはあの子しだいね」
「もう、そんな事言ってー！　ほんとは勝って欲しくないんでしょ？　ここで負ければ、トレーナーを独占出来る可能性が……むぐぐっ!?」
「テイオー、流石に怒るよ？」
私がテイオーの口を塞いでいる間に、阿寒湖特別のゲートは開き、ウマ娘達が一斉に駆け出していた。ステイゴールドは序盤、中盤と後位集団進み、第三コーナーで仕掛けていた。彼女の脚質は私と同じく差しを得意としているらしい。

『13番ステイゴールド！　ヤマニンサイレンスを差してゴールイン！　見事な三勝目をかざりました！」

試合はあっけなく終わった。

外差しを決めたステイゴールドが逃げウマを捉えてゴールイン。テレビではウイニングランをしているステイゴールドに近づき、何故か彼女からドロップキックを受けて倒れ伏すトレーナーの姿があった。とにもかくにも、彼とステイゴールドの北海道遠征は無事成功したようだった。

「あらら、勝っちゃったね。でも、あの子は別に光るものはないかな。まああの子と走る事はなさそうだけどね」

「テイオー、それって……」

「うん、ボクは今年の有マ記念でトゥインクルシリーズから卒業するつもりなんだ。まあ、国内の勝負付けはついちゃったしね！」

そう言って微笑んだテイオーは、私に手を差し出してきた。意図を理解した私は彼女の手を握り返して握手をする。いつもの勝気な笑顔を浮かべたテイオーは私から手を離し、こちらにビシっと人差し指を突き付けてきた。

「ネイチャ、次の有マ記念では絶対負けないから！　この無敵のテイオー様に挑んで来るがよいぞ！」

「はいはい……あたしだって3着で終わらせる気はないからね」

お互いに笑いあいながら覚悟を決める。

ステイゴールドは見事に勝ち上がった。

だから、私もチームの〝先輩〟としてカッコ悪いところは見せられなかった。

「よし、それじゃあ最後の特訓に行こうか！　今日はネイチャのトレーナーの家探しだね。もしかしたら

元カノの写真とか出てくるかもよー！」
「いやいや、トレーナーに限って……って待てっ！」
「やーだよー！　最後くらいボクに追いついて見せなよー！」

駆け出して行くテイオーに私は必死に食らいつく。そのキラキラとした後ろ姿に、ちょっとだけ近づけた気がした。

「あははっ、本当に見つかちゃったね……」
気まずい笑みを浮かべるテイオーから、私はその写真の束を取り上げる。そこには、今よりも少し若い彼と見知らぬウマ娘達とのツーショット写真があった。笑顔を浮かべるウマ娘達の数はざっと見て２０人以上、半分以上はトレセン学園の制服を着ている子であった。
「凄いね、ネイチャのトレーナーこんなにとっかえひっかえしてたんだねー」
「いや違うでしょ！　この写真を見て短絡的に元カノと決めつけるほどあたしもバカじゃないから！」
「ふーん、じゃあなんだんろうねこの写真」
「……」
私の胸がズキリと痛み、言いようもない不安感が溢れる。トレーナーとは少しお話しする必要がありそうだった。

ステイゴールドの過去？

『逃げ切り！　ダイタクヘリオスは堂々の逃げ切りです！　１分４５秒６はサクラユタカオーのタイムを更新する日本レコードです！』

東京レース場、芝１８００ｍで行われるＧⅡ毎日王冠。長い休養明けに出走したレースで私は１番人気に推されていた。

「うぇ～い！　勝利勝利～！　やっぱウチの逃げが最強じゃん！」

しかし、１位となって多くのカメラのフラッシュを浴びるのはちゃかちゃかとピースを決めるダイタクヘリオスだった。正直言って日本レコードを出す相手に追いすがるのは私では荷が重かった。なんでこんなキラキラした奴が相手なのかとため息を吐きたい気分だ。そんな私の肩にそっと手を乗せたのは栗毛をボブカットにしたウマ娘、イクノディクタスであった。

「ネイチャさん、ウイニングライブの練習をしましょう。今回は残念ながらセンターではありませんがね」

「あはは……そうだね。センターの引き立て役ぐらいはこなさいとね」

「無論、次は私が勝ちます。今回はヘリオスの取り巻きに徹するとしましょう」

「ういー……ヘリオスのテンションは結構疲れるんだよね。まあ勝負に負けたから仕方ないよね」

ウマ娘にとって、レースだけでなくウイニングライブも大切だ。夜に開催されるウイニングライブに向けて、イクノや他のウマ娘と共に私は控室へと向かった。

「残念、またまた3着。まっ、こんなもんだよね」
「頑張った！　お前は頑張ったぞネイチャ！　という事で秋の天皇賞は1位になろうな！」
「気がはやいねトレーナーさん。でも、怪我は治ったし、今回でちゃんと走れることは分かったから。まあ、今後ともよろしくね」
「ああ、よろしくな。それと、今回の頑張ったで賞だ」
　翌日、私はトレーナー室で開かれたお疲れ様会に参加していた。トレーナーはいつものように笑顔で私を慰める。そして、いつものように彼が自作したトロフィーを渡してくる。今回のものは金色の折り紙で作られた王冠だった。その安っぽい作りに私は笑いをこらえるのが大変だった。そんな私達のやり取りをステイゴールドはどこか冷めた目で見ていた。
「姉貴、入着すること自体、レースにおいては凄い事なんだぞ。そんなもので誤魔化されてないでもっと金目の物を要求したらどうだ？」
「あはは……あたしはこれでいいの。むしろ、これがいい。これくらいの方があたしには似合ってるじゃん？」
「姉貴が良いっていうなら文句は言わないけどよ。そこのクソ雑魚トレーナーの魂胆は姉貴を鼓舞するのに一番やすあが……むぐっ!?」
　何かを言おうとしたステイゴールドの口をトレーナーが手で塞ぐ。彼女はギロリと彼を睨んだ後、私の方を見て目を細めた。そして、トレーナーの手を無理やり払った後、それっきり閉口してしまった。トレーナーはどこかほっとしたような表情を浮かべた後、ジュースが入ったグラスを高く上げた。
「ナイスネイチャ、ステイゴールド！　とにかく俺はお前達に期待してる。だから今後の前祝いを含めて……かんぱーい！」
「はいはい、かんぱい！」
「チっ！　乾杯」
　飲み物とスーパーで売っていた惣菜を持ち込んだ小さなパーティ

の居心地は私にとっては非常に良いものであった。そして、寮の門限が近づき始めた頃、ステイゴールドは急に現れたサッカボーイ先輩に連れ去られた。先輩に対しては非常に大人しい態度を取るステイゴールドに私とトレーナーさんはくすくす笑ってしまった。

そうして部屋に残ったのは彼と私だけだ。だからこそ、私は勇気を振り絞ってトレーナーに〝あの事〟を聞こうとした。

「ねえトレーナーさん、一つ聞いていい？」

「おう、どうした？」

「んーと、トレーナーさんが北海道に遠征に行ってる時なんだけど……え～……ん～……あ～……」

「ネイチャ？」

口に出してしまってから、これはマズいと悟る。聞きたいのは彼と多数のウマ娘とのツーショット写真の事についてだ。ただ彼の留守中にテイオーと家探しをした事は言いたくなかった。

何より、私は写真について聞いてどうしたいのか自分自身でも分かっていなかった。彼の過去について、私が文句を言う資格はないし、あのウマ娘達と彼がどういう関係であろうと、今の彼が私のトレーナーとして頑張っている事には変わりない。ただ、言い知れぬ不安感が私の中で渦巻いているのは確かであった。

「どうしたネイチャ？　悩みがあるなら早めに言った方がいいぞ」

「あ～……うん。やっぱなんでもないから」

「なんでもないなんて事はないだろ。ほら、話してみ？　俺、ネイチャのトレーナー！　オーケー？」

「うざっ」

「ひでえなおい！　俺はネイチャのためを思って……」

思わず暴言が出た口を手で抑えつつ、彼の不安気な様子を見て自分自身に腹が立つ。勝手に彼の事を詮索し、自分勝手に落ち込んでいる私は傲慢という他ない。だから、私はあの写真については忘れる事にした。私は彼を信じる。それだけだ。

「ううっ……俺のネイチャが反抗期に……」

ただ泣き真似をしながらこちらをチラチラ見るトレーナーには何か相談しないといけない雰囲気を出していた。そんな彼に苦笑を返しつつ、せっかくなのでもう一つの疑問をぶつける事にした。

「それじゃあトレーナーさん、一つ質問なんだけど……」

「おう、なんだ!?」

「どうしてステイゴールドをチームに入れたの？」

「えっ……」

「あっ、別に意地の悪い質問じゃないよ。前にさ、あの子が私の成長に繋がるとかなんとか言ってたじゃん。それがどういう意味か気になるんだよねー」

少し肩をすくめ、軽く質問した私をトレーナーさんは神妙な表情で見つめてくる。それから、観念したようにため息をついてからトレーナー室に置かれているノートパソコンを開く。そして、一つの動画を流し始めた。動画はレース前のパドックインタビューのようだ。それも新バ戦らしく、どのウマ娘も緊張した初々しい様子であった。

「ねえトレーナーさん、これって……」

「おっ、次だ。まあ、見てみな」

そう言って笑顔を浮かべる彼に合わせ私は動画を見る。映し出されたのはあのステイゴールドだった。勝ち気な表情は相変わらずだが特徴的な黒髪は今とは違い、サラリと長く伸ばし、いわゆる姫カットにしていた。また、周囲が体操服で新馬戦に挑む中、彼女だけ黄色と黒を基調とした勝負服に身を包んでいたりと、正直言って浮いていた。

『それではステイゴールドさん。レースに向けての意気込みをお願いします』

『愚問ですわね。もちろんわたくしが勝ちますわ。社台家のウマ娘がデビュー失敗なんてお話にもなりませんわ』

『凄い自信ですね……』

『おーほっほっほ！　当然ですわ！　なぜなら、わたくしは世界最強だからですわ！』
『な、なるほど……』

そう言って高笑いするステイゴールドは次のレース映像で３着に沈んでいた。勝利のインタビューを受けるウマ娘の後ろで、彼女は涙目で地団太を踏んでいた。

「どうだネイチャ？」
「いや、どうだって言われても……というか何あのお嬢様口調……」
「アイツは腐っても名門社台家出身、そこは目を瞑ってやってくれ。ほい、それじゃあ二戦目の新バ戦の映像だな」
映し出されたのはまたもやレース前のパドックインタビュー。ステイゴールドの様子は前回と全く同じ、勝気な表情を浮かべていた。
『前回は３着という結果でしたが……』
『その程度の事で社台家のウマ娘が屈するとでも？　まあ見てなさい。本日はわたくしの華麗なるウイニングライブを見せて差し上げますわ！』
『あ、はい……頑張ってください……』
『おーほっほっほ！　こんなしょぼいレース、世界最強のわたくしにとっては通過点に過ぎませんわ！』
そう言って高笑いするステイゴールドは次のレース映像で１６着の大惨敗。勝利のインタビューを受けるウマ娘の後ろで、ラチをガシガシと蹴りつけていた。そして、インタビューはトレーナー陣営の様子を映し出す。そこには、肩をすくめて苦笑する外国人トレーナーの姿があった。
『担当するステイゴールドさんは最下位に終わりましたが……』
『ふむ、あの子は素質はあるネ。でも、本当に指示を聞かないノーネ！』
ステイゴールドにトレーナーがついていた事にも驚きだが、その外国人トレーナーの姿を見て私は驚く。何故なら、かのトレーナーを知

らないウマ娘はいないと言われるほどのトップトレーナーだったからだ。
「わざわざ社台家が用意したフランスのトップトレーナーの教えを受けていたのに、ステイゴールドはこの後に癇癪を起して勝手にあのトレーナーのチームから出て行ったらしい。本当にもったない事だよな」
「あーうん……やっぱあの子ってあたしとは住む世界が違うお嬢様なんだね……」
「確かに環境は違うかもしれない。でも、アイツもお前と同じ女の子で、レースに夢見るウマ娘だ……おっと次の映像だ」
　次の映像は新バ戦ではなく未勝利戦。中央で活躍するためには絶対に越えなければならない壁だった。舞台は芝ではなくダート。言い方は悪いかも知れないが、ダートは芝より〝華〟がないというのはウマ娘にとっては常識だ。プライドが高いステイゴールドもそれが分かっているのだろう。パドックインタビューを受ける彼女の様子はいつもより覇気がなかった。
『えっと……』
『わたくしは最強ですわ！』
『ひっ!?』
　レポーターが怯えて逃げ出すという実に短いインタビュー。その後、レースに挑んだステイゴールドはと言うと。最終コーナーを曲がり切れず、左に大きくよれて逸走していた。もちろん競走中止。最下位以下の着順だった。そんな彼女は鬱憤を晴らすようにラチを蹴りつけていた。
『わたくしは最強ですわ……よしんば競争中止だったとしても世界最強……ふふっ……』
『あらあら、物に当たるのは良くないわね』
『ひいっ!?　お姉さま!?　これは違います！』
『何が違うのかしら？　それより、貴方は〝出資者の方達〟の厚意を踏みにじり続けているわ。せめてあの方達の元が取れるくらいには私が鍛えて上げる』

『いりませんわ！　わたくしは貴方達に頼らなくとも世界最強のウマ娘に……おぶっ!?』
　レース場内に侵入し、ステイゴールドに頭突きを浴びせたのはあのサッカーボーイ先輩であった。そんな彼女自身も額からダラダラと流血しながら気を失ったステイゴールドを片手で引きずりながら画面外へと消えていった。そんな様子を映した映像をトレーナーはどこか愛おしそうに見ていた。それが少し、何故かムカついた。

「それでトレーナーさん、結局どういう事なの？　映像見せられてもあたしはわかんないんですけど」
「おいおい、流石に分かれよネイチャ。つまり、あいつは社台家が全力でバックアップしたり、あのトップトレーナーも認めるほどの〝素質〟を持ってるんだ。気性難でトレーナーの間では敬遠されていたが、俺はあいつが狙い目だとメイクデビュー戦を見てから思ったんだ。いやあ、俺の穴党の血が騒いでな……」
「穴党……？」
「おっと、今の言葉はなしだ。とにかく、アイツの実力は確かなんだ。だけど、俺がアイツをスカウトした主要因はそれだけじゃない。単純に、ネイチャの刺激になるかと思ったんだよ」
「いや、確かにあの子が来てからは毎日は刺激的になってますけど。主に暴力的な意味で」
「そういう意味じゃないさ。ただ、理由はネイチャも薄々は分かってるんだろ」
　ニヤリとして笑みを浮かべる彼に対し私は閉口する。そんな彼の視線を避けながら、居心地が悪くなって行く感じがした。それもそのはず、彼の意図は全ては分からないが、理解出来る点は以前からあったからだ。
「ネイチャの強さはどんなレースでも自然体で挑める事だ。過度な緊張をせずに当たり前のように入着する。中央選りすぐりのウマ娘がひしめく重賞で3着になって当然……みたいな態度のネイチャが傍から見たらどれだけ凄い奴なのかってお前は理解してるのか？」

「ちょいまち！　そ、それはあたしのアイデンティティというか……」
「ネイチャは本当に凄い奴なんだ。確かに、トウカイテイオーみたいに色んな意味でやべえウマ娘は数多くいる。でも、レースではお前はそんな相手に決して引かない。一生懸命なネイチャの姿は本当に見ていて胸を熱くさせる。それは、ファンも同じだ。グランプリに出走できた事がその証明だろ？」
「あうっ……」
「でも、一方でネイチャの〝悪い癖〟は俺も自覚してる。精神論はあんまり言いたくないが、気持ちの問題はレースに大きく絡む。特に怪物が集うＧＩ競争ではな」
　彼は笑いながら私の頭を撫でる。それから、視線を宙に向けて何度か頷いていた。

「別に真似しろってわけじゃない。ただ、俺は君にもっと〝自信〟を持って欲しいだけなんだ」
「いやでも、あたしは……」
「俺の中での世界最強は今も昔も君だ。今後ともよろしくな！」
「っ……！」

　体中の血液が、上へと昇ってゆくのを感じた。私は赤くなった顔を彼に見られたくなくて、顔を伏せる。トレーナーさんはそんな私を撫で続けていた。
　正直言って、彼の想いは私には荷が重い。それでも、私のやる気はどんどんと溢れてくる。どこまでやれるかは分からない。でも、もう少し頑張ろう。そんな気分が心の底から湧き上がって来た。
「おっと、そろそろ門限だネイチャ。また明日な」
「あっ……うん……」
　彼の大きく暖かな手が私から離れる。それが少しだけ名残惜しかった。そして、流れるようにポケットから取り出した煙草をくわえ始めた彼に私は早速幻滅した。
「さてと、俺は残業だ。こんな俺でもやる事は色々あってな……」

「トレーナーさん、学園内は禁煙でしょ？　というかあたしもアスリートの端くれだし、副流煙とか……」
「申し訳ございませんでした！」
「ふふっ、素直でよろしい。それじゃあまた明日ね、トレーナーさん」
「ああ、また明日な」

ひらひらと手を振る彼に別れを告げ、私は寮へとひた走る。その足取りは今までにないほど軽いものであった。

自室へと帰った私は、早速〝コレクション〟に今日受け取った王冠を模したトロフィーを入れた。そうして、ベッドへと身を投げた私はまもなく眠りに落ちる。

彼の作ったちゃちな王冠を受け取り、彼に本物の〝王冠〟を渡す。

そんな夢を見た気がした。

京都新聞杯

トレーナー室に集まったのはいつものメンツ、トレーナーさんと私とステイゴールドだ。しかし、その雰囲気はいつも以上に静かで真剣だった。中央に置かれたホワイトボードには〝京都新聞杯作戦会議〟とデカデカと書かれている。そんな中、最初に口を開いたのはトレーナーさんだった。

「という事でステイゴールドの重賞初挑戦、京都新聞杯への出走が決まったぞ。解説のネイチャさん、お願いします」

「えっと……はーい、京都新聞杯は中京レース場、芝２２００ｍで行われるレースですね。上位三頭のウマ娘は菊花賞への優先出走権が与えられるので、最後のクラシックレースへ滑り込みたいウマ娘にとっては何が何でも取りたいレースです。あ、ちなみにあたしは去年出走し、無事１位になってますよ」

「うーん、流石は俺のイチ押しのウマ娘、照れながらの笑顔が可愛いですね。という事で重賞初挑戦となるステイゴールドさん、意気込みはどうでしょう？」

「えっ……いや……うん……？」

「京都新聞杯を制するのは菊花賞を勝つためにも重要ね。ここで力を示せば、菊花賞にもきっと勝てる……ってね……んふふっ……！」

「姉貴……？」

何故かステイゴールドが私に呆れたような目線を送ってくる。トレーナーの突発的な茶番にノって付き合ったのが悪かったのだろうか。

「クソ雑魚トレーナー、作戦会議をするっていうならもう少し真面目

にやってくれ」
「お、おおう……ステゴからそんな言葉が出るなんて！」
「いや、当然だろ。オレはこれでも色々と背負ってるもんがあるんだ。勝利に繋がるならオレはなんだってするからな」
　そう言って偉そうにふんぞり返るステイゴールドにトレーナーは何故か小さな拍手を送っていた。
「それでクソ雑魚トレーナー、なんか作戦はあるのか？　参考程度には聞いてやるよ」
「その作戦だが……いつもの必勝法で問題ない。つまりは逃げや先行は気にせず脚をためて最後に差す。それだけだ」
　トレーナーさんの言った必勝法とやらは実に初歩的な事であった。思わず出そうになった文句は彼に手で制されて止められた。
「この必勝法は差しを得意とするウマ娘にとっては基本的な事だが、この基本をきっちりこなせるやつは意外と少ない。ウマ娘一人一人が違った作戦や仕掛けをするんだ。自分のペースを維持するのは至難の業だ」
　珍しく真面目な彼に私は確かにそうだと頷きを返す。良く言われるレースに絶対はないというヤツである。だがそれを聞いていたステイゴールドは口を尖らせて不満気であった。
「んじゃ、こんな作戦会議意味ねえじゃんか」
「まあ、待て。今回は自分のペースを維持する上で障害となるウマ娘をピックアップした。そいつらの事は一応頭に入れとけ」
　そう言ってトレーナーはホワイトボードにウマ娘のデカデカとした写真をマグネットでとめた。その写真を見て、ステイゴールドはうげっとした表情を浮かべる。写真に写っていたのはふわふわのロングヘアーの一部を長い三編みにし、柔和な微笑みを浮かべた容姿端麗なウマ娘だった。
「まずはステイゴールドの世代の注目株、メジロブライトだ。どんな奴かはよく知ってるよな？　確か、お前の友達なんだよな？」
「なんでオレの交友関係知ってるんだよ。気持ちわりーなオイ……ま

あその情報はちょっと古いがな」
「何かあったのか？」
「察しろ。今はちょっと疎遠なんだよ。同じクラスにいるけどな」
　舌打ちをしながら不機嫌な顔になるステイゴールドにトレーナーさんは肩を竦めつつも、マーカーを持ってメジロブライトの実績をホワイトボードに書き始めた。
「出身は名が示すように名門メジロ家だ。主な勝ち鞍はホープフルステークス、共同通信杯、クラシックレースは皐月賞4着、日本ダービー3着とこの世代のトップ層である事はもう疑いようがないな。脚質は追い込みだから、こっちからは何も出来る事はない。ただ、ラストの直線でコイツがお前より前にいたなら……まあ頑張れ！」
「おいこら、そのクソ雑魚アドバイスやめろ」
「まあ、出遅れ癖があるからそれに期待って事だな。それに、メジロブライトの性格や走りについてはお前の方が詳しいだろ？　この際だから本人に聞いてみろ。今度の京都新聞杯はどうするんだってな」
「だけどよ……」
「ステイゴールド、お前は阿寒湖特別に勝って重賞に挑戦してるんだ。少し遅れたかもしれないが、同じ土俵に立つ仲間だ。もう一回、メジロブライトと腹を割って話してみろ」
「うっせーバーカ」
　少し語気が小さいステイゴールドはそのまま黙りこくってしまった。それから、トレーナーさんは苦笑を浮かべながらもう一枚の写真をホワイトボードに止める。満面の笑みを浮かべる栗毛のウマ娘だ。彼女についてはこの前テレビでも見かけた話題のウマ娘だった。
「そして一番警戒すべきなのがこのウマ娘、マチカネフクキタルだ。直近でさくらんぼステークス、神戸新聞杯を連勝している。問題なのはそのレース内容だ。神戸新聞杯ではラストの直線で恐ろしい末脚で逃げるサイレンススズカを最後方から差し切って勝利してる。菊花賞への出走も確定してる今話題のウマ娘だな。こいつがラストの直線でお前より前にいたら……まあ頑張れ！」
「またそれかよ！」

「仕方ねえだろ。基本的にレースは自分との戦いだ。毎回勝てる作戦なんてない。ただ、それはそれとして今日はそのマチカネフクキタルが出張占いをしてるようだからここに呼んでおいた。まあ、親しみやすい奴だし、必要以上に恐れる事はしなくていいさ。占いついでにレースの事も聞いておけ、少しは口を滑らせるかもな」
「えっ……試合前にライバルのウマ娘を呼びつけるなんて……なかなかやるねトレーナーさん」
「おう、ネイチャ。もっと俺を褒めて良いぞ！　つ―ことで彼女が来るまではここで座学だな。中京レース場は最後の坂が……」
　そのまま、トレーナーさんによるレース場解説が始まり、まとめに入った段階で件のウマ娘、マチカネフクキタルがトレーナー室へ姿を現した。だが、部屋に訪れたのは彼女だけではなかった。
「はいはいどーも！　出張占い師のマチカネフクキタルです！　私に占いを頼むなんてとってもいい判断ですよ！　それとこの機会に是非私と一緒にシラオキ様の……むぐっ!?」
「布教活動はやめようねフクキタル」
「むむっ、今日は助手なんですから私の指示にむぐっ!?」
「助手じゃなくて貴方のストッパーだから」
　そう言ってマチカネフクキタルの口を押さえるのは、栗毛をストレートヘアにしたどこか儚げなウマ娘だ。彼女を見てトレーナーさんはどこか興奮した表情で、ステイゴールドはというと苦虫を噛み潰したような顔をしていた。
「フクキタルの占いを受けたいって言うから。どんな人かと思ったけど、貴方だったのね、ステイゴールド」
「チっ！　嫌な顔見ちまったな」
「毎日クラスで顔を合わせてるじゃない。メジロブライトとサニーブライアンとは仲直りしたの？」
「あーうっせえ！」
　どこか心配したような顔つきの栗毛のウマ娘に、ステイゴールドはそっぽを向けていた。そして、私はと言うとトレーナーの袖を引っ張って小さく耳打ちしていた。

「トレーナーさん、あの子は……」
「あいつはサイレンススズカ。最近、あのレジェンドトレーナーが自分のチームに引き抜いたらしくてな、トレーナーの間でも話題のウマ娘だ」
「へえー」
　言われてみれば納得である。マチカネフクキタルも、サイレンススズカも私の〝眼〟からみてとてもキラキラと輝いていた。世代の主人公格が相手となると、ステイゴールドも今回は厳しい戦いとなりそうであった。
「さて、邪魔は入りましたがさっそくステイゴールドさんを占ってあげましょう！」
「オレは占いなんて信じねーぞ……」
「大丈夫です！　貴方が信じなくても私は信じてますからね！　京都新聞杯で戦う貴方の〝運〟を見定めます！」
「こいつ……」
　どうやら、マチカネフクキタルもステイゴールドを偵察する意図があったらしい。彼女は妙にキラキラとした目を輝かせながら懐から取り出した水晶玉に手をかざし始めた。
「むむむっ！　結果が出ましたよ！　貴方の運勢は……末吉ですね！　このまま真面目にレースに取り組めばいつか幸せを掴めるでしょう！　ちなみに今回の京都新聞杯は貴方にも運が向いてるので、お互いがんばりましょうね！」
「はいはい、毒にも薬にもならない占いしてくれてありがとよ」
「ところでステイゴールドさん、貴方は日々の生活に退屈していませんか？　それならこれを機に私と一緒にシラオキ様を信仰してウマ娘革命を……むぐっ!?」
　占い結果を伝えた後、変な事をいいながら詰め寄るマチカネフクキタルをサイレンススズカが口を抑えて捕縛する。そうして、苦笑を浮かべながらスズカはステイゴールドと向き合った。
「フクキタル、もう帰りましょうね。それと、ステイゴルードは今度のレース、頑張ってね。普段のフクキタルは少し頭がおかしいけど、

レースでは本当に強いから……」
「油断はしねえよ……」
「ふふっ、以前の貴方はメジロブライトやサニーブライアンの傍で高笑いしてたのに、雰囲気が変わったわね」
「うっ……」
「それじゃあまたね、いつか、私とも走るでしょうから」
サイレンススズカはそう言って微笑んだ後、彼女に抑えられてジタバタと暴れているマチカネフクキタルを引きずりながらトレーナー室を後にした。色んな意味で濃い二人が去った後、トレーナー室はしんと静まり返った。
「まあ、あれだ。頑張れステイゴールド。俺は応援してるぞ！」
「お前はお前でもう少し実利のある事言えよ！」
「そんな事いわれても……いててててっ!? 急に何しやがる！」
「うっせー！ 俺の前にスズカを連れてきた罰だ！ アイツは目が親父の愛人と似てて嫌いなんだよ！」
トレーナーさんがステイゴールドのプロレス技の餌食になる。今日も今日とて、彼女に理不尽に悲鳴を上げる彼を見て私は溜息をついた。

それから約一週間後、京都新聞杯の開催日となった。今回は重賞という事でチームの一員である私も彼女の応援という名目で遠征に参加している。私にとっても約一年ぶりとなる中京レース場はつめかけたファンによって満杯になっていた。
そしてメインレースである京都新聞杯が近づくころ。私達はステイゴールドの控え室に集まっていた。珍しく椅子に座って微動だにしないステイゴールドに私とトレーナーは顔を見合わせて笑いあう。どうやら、彼女も初の重賞というだけあって緊張しているようだっ

た。
「ステイゴールド、頑張れよ」
「うっせ！　そんなの言われなくても分かってる！　このクソ雑魚トレーナー！」
「はいはい、それより今日はステイゴールドの重賞初挑戦だからな。例え勝ったとしても、負けたとしても良い経験になる。それと試合後には俺特製の参加賞も用意してあるぞ！」
「参加賞……？」
「喜べ！　俺が丹精込めて作ったんだぞ！」
そう言ってトレーナーさんが取り出したのはあの手作りトロフィーだった。やっぱり、彼女にも渡すようだ。その事実に何故だか私は胸が苦しくなる。別に価値のあるものではないが、あれは私とトレーナーさんの……
「ちょっと貸してみろ」
ステイゴールドはトレーナーさんからそのよれよれのトロフィーを奪い取った。そして、そのトロフィーをまじまじと観察した後、彼女は大きくため息を吐いた。
「あっ……」
それは、思わず私の口から漏れ出た声だった。
ステイゴールドはトレーナーさんが作ってくれたトロフィーをビリビリに破り捨てていた。
地面に散らばるそれを、私はただ見つめる事しか出来なかった。

「いるかこんなもん。オレが欲しいのはお前が作った偽物じゃねえ」
「そうか、お前らしいなステイゴールド……頑張れよ！」
「まあな……勝ったら肉奢れよな」
「ああ、任せろ。最高級の店に連れてってやる」

そう言ってステイゴールドはトレーナーと拳を合わせた後、控え室を後にした。

結局、ステイゴールドは京都新聞杯で４着の結果に終わった。